

中医学入門講義

東洋堂土方医院 土方康世

リニューアル第10回

第4章 疾病と病因-2

ナビゲーター：戸城えりこ ERIクリニック

コメンテーター：仲尾真美代 しずく堂薬局堺駅前店

アドバイザー：山崎武俊 洛和会音羽リハビリテーション病院

目次

改訂中医学基礎、中医学入門(第2版)を主に参考とした。

緒論

I. 中医学の歴史

II. 中医学基礎の概要

III. 中医学理論の基本的特徴

上篇 基本理論

第一章 気・血・津・液

第二章 経絡

第三章 臓腑

第四章 疾病と病因

第一節 病因

1. 六淫と癘気 (風邪・寒邪・火「熱」邪・湿邪・暑邪・燥邪)

2. 内傷七情

3. 飲食失調

4. 房室と勞倦による損傷

5. 外傷・寄生虫

6. 病理的産物 {1) 痰、2) 瘀血}

第二節 発病の機序

第三節 疾病の経過における二種の病理

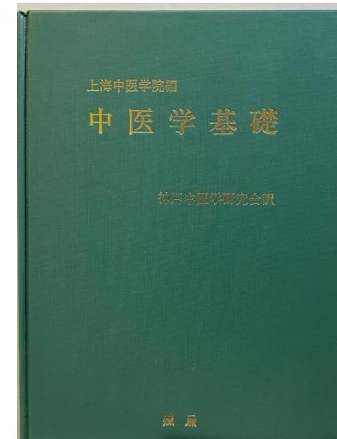
1. 邪正闘争

1) 正勝邪退

2) 邪盛正衰

3) その他

2. 陰陽失調



うめだ中医学勉強会 2013年4月—2018年1月

第1回	2013年 中医学の歴史 中医学基礎の概要 中医学理論の 4月 基本的特徴 気・血・津・液・精
第2回	2013年 気血津液精 陰陽五行説 6月
第3回	2013年 五行理論、経絡 9月
第4回	2013年 臓腑と臓腑弁証 第1節 心 11月
第5回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第2節 肺 1月
第6回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第3節 脾胃 3月
第7回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第4節 肝胆 5月
第8回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第5節 腎 7月
第9回	2014年 第4章 疾病と病因 9月
第10回	2014年 第4章 疾病と病因-2 11月
第11回	2015年 五行理論の臨床応用 1月
第12回	2015年 五行学説理解のための説明 3月
第13回	2015年 五行学説理解のための説明 臓腑弁証ほか(脾肺、 5月 大腸)
第14回	2015年 相生・相剋・相乗・相侮の症例検討、五行理論を 7月 使った 治療戦略
第15回	2015年 脈診 9月

第16回	2015年 舌診 11月
第17回	2016年 脳 子宮 三焦 1月
第18回	2016年 八綱弁証 3月
第19回	2016年 気血弁証 5月
第20回	2016年 臓腑弁証 心小腸 7月
第21回	2016年 臓腑弁証 肺大腸 9月
第22回	2016年 臓腑弁証 腎と膀胱 11月
第23回	2017年 病邪弁証 風寒 1月
第24回	2017年 病邪弁証 六淫(湿、熱/火、燥) 3月
第25回	2017年 病邪弁証 六淫(食積、気滯、血瘀、痰飲、水腫) 5月
第26回	2017年 靈梅参について 7月
第27回	2017年 傷寒論と温病、六経弁証 9月
第28回	2017年 外感熱病弁証 11月
第29回	2018年 衛気営血弁証 1月
	残り部分 治則(正治反治、祛邪扶正、調整陰陽)と治法 (汗法、清法、下法、和法、温法、補法、消法、開 竅法、固澀法、鎮納法)

土方先生資料

寺子屋中医メモ

第4章 病因と発病の過程

1 病因（六淫、癘氣、七情内傷、飲食、労逸、外傷、瘀血、痰飲）

2 発病の原理

- (1) 正と邪のバランス
- (2) 内外の環境と発病

第5章 病機(=病理機序)

- 1 陰陽の失調
- 2 正氣と邪氣の争い

3 氣血失調

4 津液の失調

5 内生五邪

6 臓腑の病機

第4章 疾病と病因（続き）

第一節 六淫と癘氣(第9回)

第二節 発病の機序 Text1 = PP4

第三節 疾患発生根本原因
(すべては邪正闘争と陰陽失調の現れ)

Text2-6 = PP5-8

Text6 は小括

第5章 陰陽五行説

第一節 陰陽学説 Text 7-17 PP9,14-33

- 1 陰陽学説の基本的観点
- 2 陰陽学説の具体的応用

第二節 五行学説

症例1 30歳 陰陽失調症例 PP10-13

症例2 71歳易感冒 PP34 腎虚からの子盗母氣

症例3-5 参蘇飲、香蘇散 PP35

症例6-7 人参湯の2例 PP39

症例8 6歳 真寒化熱の症例 PP41-42

第4章 病因と発病の過程

2.発病の原理

(1)正と邪のバランス

- ①人の抵抗力＝正気である。正気の不足は疾病の発生の根源である。邪気が侵入できるのは正気の抵抗の不足のため。体の不調により抵抗力は衰えてゆき、病気になりやすくなる。
- ②邪気は発病の重要な条件である。正気は発病の過程の中で主導権を握るが、邪気も重要な作用を持つ。伝染病や外傷は抵抗力ではどうにもならないことが多い。
- ③正気と邪気の勝負で発病するかどうかが決まる。正気が勝てば発病しないし、邪気が勝てば発病する。体質によって発病重症度も異なるため、正気の強弱は回復の早さをも左右する。

(2)内外の環境と発病

内環境は人体の正気を指す。人は昔から自然と調和して暮らしてきたが、その自然環境の変化や汚染によって発病するということがある。気候、地域性、生活、仕事環境などが外環境も発病に関与。一般的にいうと体質と精神状態が正気の強弱を決定している。

○北海道と沖縄、都会と田舎

▶診断には症状だけではなく、どのような状況(外環境)から症状がでるのかを把握することも重要である。

①体質と正気

体質の強壮は、臓腑の活動が盛んで、精、気血、津液などが充実していることを示し、正気も強い。その逆に、虚弱体質は気血津液が不足し、正気も弱い。体質は先天的なものと、後天的な栄養状態や運動も関与している。

②精神状態と正気

精神状態は、感情の直接的な影響を受ける。精神状態が良いと、体の気の巡りが良く、気血は調和し、臓腑の機能も正常に働く。このため正気は強くなる。逆に精神状態が悪いと気が詰まり、体調が悪くなる。よって、正気も弱くなるのである。

5章 病機

病機とは、病理機序であり、疾病の病因、発生、発展、変化（病位・病勢）の過程を指す。

具体的には、正気と邪気の争い、陰陽失調、気血のバランス失調、臓腑経絡の機能失調などが「病機」に相当する。

1 陰陽の失調

陰陽のバランスが崩れると、各種疾病の原因につながる。陰陽失調とは陰陽の消長・気血の変化、臓腑、経絡の連携などの体内の生理的活動が壊された状態である。六淫、七情、飲食不摂生、精神的ダメージなどから発病に至るには、必ず体内の陰陽失調があって行われる。つまり陰陽失調は疾病の発生や発展の根拠でもある。例えば「心腎不交」「陰虚陽亢」などである。

（1）陰陽どちらかの勢いが強すぎる

陰と陽は互いに制約しあっているため、片方が強すぎると、時間がたてば必ずもう一方の衰えを引き起こす。

①陽の勢いが強い場合

陽が盛んになりすぎると体内に熱が過剰になる。一般的に外感病でよく見られ、邪気の侵入が見られる実証を指す。熱、顔が赤い、いらいら、便秘などの症状が現れる。当初は陰虚を伴わない。時間が経つと陰の虚を伴う場合もある。相対的な虚か絶対的な虚かを区別しなくてはならない。

相対的な陰虚（陰陽のバランス 図 a）

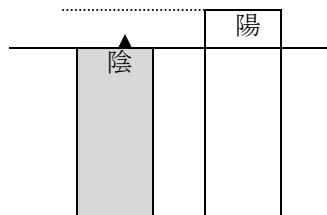
陽が盛んなため（実熱過多）、陰が相対的に少なくなったように見える（実熱盛んで陽が多いため、陰の絶対量は減っていないが割合が減る。

絶対的な陰虚（陰陽のバランス 図 b）

熱の状況が長びき、陰液の消耗が起こり、陰の絶対量が不足した状態。これは、病状が進んで最初実熱症だったのが、陰虚がすすみ虚熱証を帯びてくる（この段階は実熱兼陰虚証）。つまり相対的な陰虚から、絶対的な陰虚に進んだことを示す。

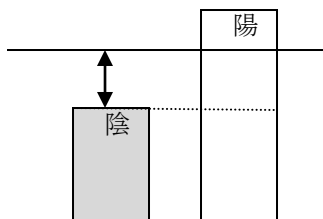
図：陰陽のバランス

a 相対的な陰虚



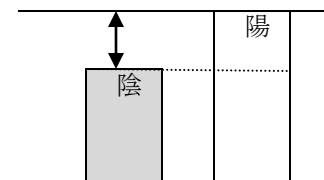
陽実=実熱（高热が多い）

b 絶対的な陰虚



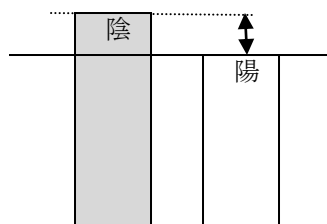
陰虚 陽実=虚熱+実熱

c 陰虚のみの虚熱のみ



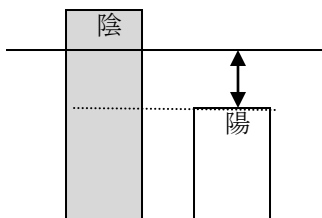
陰虚=虚熱（微熱が多い）

d 相対的な陽虚



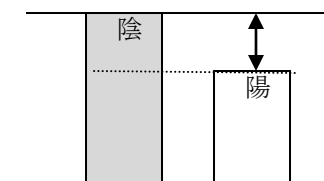
陰実=実寒

e 絶対的な陽虚



陽虚 陰実=虚寒+実寒

f 陽虚のみの虚寒い



陽虚=虚寒

②陰の勢いが強い場合

冷たい物の食べ過ぎや、急な寒い環境への接触などにより、（寒）陰が盛んになりすぎると体内に寒が過剰となり陽虚となる。陽虚になると生理活動をするための動力が不足し代謝・機能障害が起こり、病理的産物が体内に蓄積するようになる。体が冷える、血色が悪い、などの症状が見られる。理論上は、陰が勝っている時は陽の相対的不足（陰陽のバランス 図d）と絶対的不足（陰陽のバランス 図e）があるが、実際は陰の発病自体、陽に陰が勝たなければ発病しないという実情があるため、その区別は難しいものとなる。基本的には程度の差はあるが、陽虚を伴うということである。

▶相対的陽虚と絶対的陽虚

図dは陰が盛んになったための寒（寒い環境に長時間いる、冷たい物を食べる）。一時的に外部から冷やされた状態の為、冷える症状を中心に示す。正常人が-4度の部屋に入った場合。

図eは陽虚による寒：環境による冷えの症状＋冷え性による気虚、陽虚症状：冷え以外に疲れやすい、消化不良を伴う下痢など。冷え性の人が-4度の部屋に入った場合。

(2) 陰陽どちらかが衰える

なんらかの原因で陰または陽の一方の量の減少が起こると、相手を制約できなくなるため、相手が強くなったかのように見える。陰陽が衰えるのは気血津液の不足・臓腑経絡の機能減退などにより精気不足となるためである。

①陽の衰え

陽の衰え（陽虚）は多くは先天的の不足が多い。

その他後天的な栄養不足、長患いで耗気しておこることがある。

一般的には、脾腎の陽虚が主となる。腎陽が全臓器（肝・心・脾・肺）に陽を与えるため、腎陽虚になると全体に供給する熱が不足し、全身が冷え機能の減退も現れる。

（陰陽のバランス図 f）

②陰の衰え

陰の衰え（陰虚）とは体の滋養効果を持つ物質（陰）が消耗され減少すること。

原因は他の邪気から転化した火（他の邪気がいつまでも除かれずに同じ所に存在すると、周りから体熱が入り込んできて熱を帯びる→化熱）による体液（陰液）の消耗

（傷陰）で起こる。

又長患いすると患っている部位が化熱傷陰する。

一般的には肝腎の陰虚が起こりやすく主となる。（陰陽のバランス図 c）

陰虚の特徴のある症状：五心煩熱（手足の平が熱く感じる症状：不快感伴うことが多い）

舌紅少苔（虚熱により舌体の色が赤い。陰虚なので苔の材料が少なくほとんどない状態）

▶陽が盛んになりすぎる場合は実熱と言って、熱の症状のみが強調されるが、図 c の陰虚による陽が相対的に強くなったように見える症状は熱の症状が少なく（虚熱と呼ばれ微熱の事が多い。陰によって体の熱を調整できなくなった時に現れる熱→相対的に陽が多くなるための熱）盗汗など虚の症状が顕著に現れる

（３）陰陽どちらかが傷つく

陰陽のどちらか一方が損傷すると、経過においてもう1方にも影響を与え、両方が虚になる状況を作り出すこと。陰陽互損という。陰陽は互いに転化しあうため、一方が減ると他方がそれを補うように作用し均衡を保とうとする。長びくと、両方共不足する事態になる。この理論から、陰陽の一方だけを補いたい場合でも必ずもう1方への影響を考慮して、両方を補う処方構成にする。ただし、各虚の度合いに応じて処方の比率を変える。

▶気と血、血と津液など互いに補い合う関係であるため、どれかが少なくなるともう片方がそれを補う。

（４）陰陽が互いに拒絶する

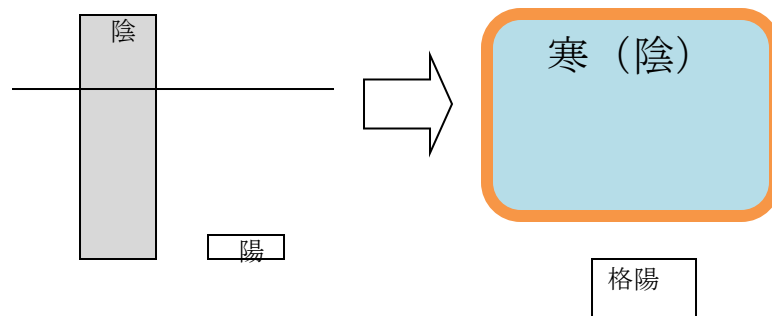
陰陽が体内で混ざり合わず、互いに完全に隔離した状態を陰陽格拒という。
体内の寒や熱が強すぎるため、完全に逆のものはねのけてしまう

（冷えすぎると内部は陰寒ばかりで上や表面にだけ温熱が追いやられる）
のが原因である。

治療では中は寒ばかりなのに、表面は温いことがあり、誤って冷やすと重症か又は死ぬので注意すべきである。

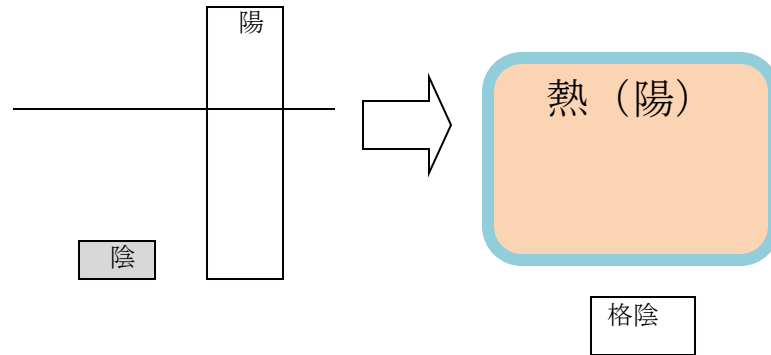
陰陽の失調の中でも比較的特殊なもの。格陰、格陽と呼ばれる。

格陽：中は寒のみが充満して陽が入れず、陽が外側に追いやられ隔離された形となる。一見症状は熱（陽性）症状に見えるが、実際は体内に寒のみが存在する。



格陰：中に強すぎる熱がこもり、陰（寒）が完全に外へ追いやられ
外表へ隔離された形となる。

一見、表面からは寒の症状に見えるが、病の原因は中に閉じ込めら
れた熱にある。



（５）陰陽どちらかが失われる

亡陰、亡陽の二つがある。

一般には、体内の陰液（汗）や陽気が突然大量に失われた場合に起こる
→生命の危険。（吐血など）

大量出血や大汗（長時間の真夏のゴルフなどで）をかいた後の強烈な脱
水症状のあとに起こるショック状態に多く見られる

2. 正気と邪気の争い

(1) 正邪と虚実

虚とは正気の不足をいう。正気の虚から疾病が起る場合に虚が原因の疾病という言い方をする。虚の人は気血津液臓腑の働きが弱く、抵抗力も落ちている。

実とは邪気の侵入が原因で疾病が起こる場合をいう。六淫の侵入や痰、血、水、食などが体内に溜まると疾病の原因となる（咳嗽患者の粘稠な喀痰・黄膩舌苔は邪実）。便秘なども実証になる。

正邪盛衰は単なる虚実のみの時と、慢性化した複雑な経過をたどる時は、虚と実が同時に存在する。つまり正気が弱いから邪気が侵入する（肺気虚があるため咳嗽・粘稠な痰もある）。

(2) 正邪と疾病

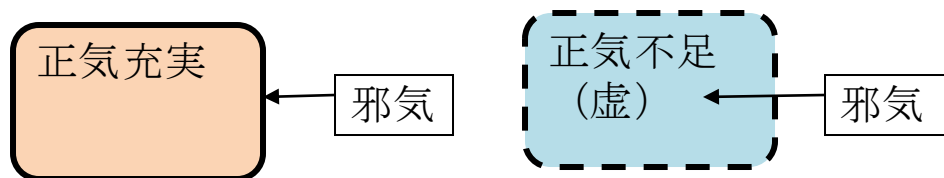
疾病の発生・発展・転帰の過程において、正邪のバランスは絶えず変化している。正気が邪気に勝てば回復に向かうし、負けると悪化する。慢性化すると正気と邪気が拮抗し悪い状態が膠着状態になったり、邪気が去った後も正気が回復しない（解熱したのに咳が続く）こともある

▶正気と邪気・虚と実

正気が充実していれば（抵抗力）邪気を寄せ付けず、

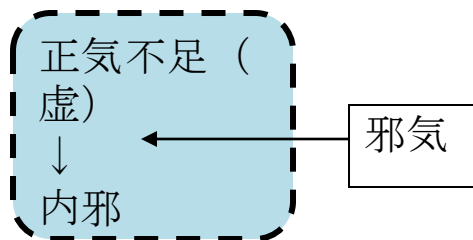
正気が不足していれば、邪気に入られやすくなる。

例 正気が充実していれば風邪をひかないが、何らかの理由で正気が不足したとき、風邪をひき易い



正気不足によって体内に余分なもの（内邪）がたまり、
外邪と結び付いて症状を悪化させることある。

例 普段から浮腫のある人が、梅雨時期になると症状が悪化する



第二節 発病の機序

人体における陰陽の消長・気血の生化・営衛の運行などの生理的活動は、病邪に対する防御・抵抗の能力を持っており、「正（正気）」と称する。

これに対し人体を傷害する因子を「邪（病邪、邪気）」と称し、主に外感六淫や痰飲・食積（食物が積滞すること）、瘀血などを指す。

人体の正（気）が強盛であったり、邪（気）が弱いときは「正（気）はよく、邪（気）を御す」で発病に至らない（靈樞・百病は始生篇：風雨寒熱は、虚を得ざれば、邪は独りにて傷つくることあたわず）・（素問・刺法論：正気内に存ずれば、邪は干すべからず）。

逆に、人体の正気が弱いか、邪が強力であると「正（気）は邪に敵せず」で発病する（素問・評熱病論：邪（気）の湊まる所、その気は必ず虚す）。

以上、邪正闘争での疾病発生根本原因は、傷害性外因ではなく人体の内部状態である。病因が作用した後、人体の陰陽・気血・経絡・臓腑が反応して発病する。

この他、人体が統一体であるから、口内炎や皮膚化膿など局所病変も、全身の陰陽・気血の失調と関連している。

第二節 発病の機序

人体における陰陽の消長・気血の生化・営衛の運行などの生理的活動は、病邪に対する防御・抵抗の能力を持っており、「正（正気）」と称する。これに対し人体を傷害する因子を「邪（病邪、邪気）」と称し、主に外感六淫や痰飲・食積（食物が積滞すること）、瘀血などを指す。

人体の正（気）が強盛であったり、邪（気）が弱いときは「正（気）はよく、邪（気）を御す」で発病に至らない（靈樞・百病始生篇：風雨寒熱は、虚を得ざれば、邪は独りにて傷つくることあたわず）・（素問・刺法論：正気内に存ずれば、邪は干すべからず）。

逆に、人体の正気が弱いか、邪が強力であると「正（気）は邪に敵せず」で発病する（素問・評熱病論：邪（気）の湊まる所、その気は必ず虚す）。

以上、邪正闘争での疾病発生根本原因は、傷害性外因ではなく人体の内部状態である。病因が作用した後、人体の陰陽・気血・経絡・臓腑が反応して発病する。

この他、人体が統一体であるから、口内炎や皮膚化膿など局所病変も、全身の陰陽・気血の失調と関連している。

第三節 疾病の経過における二種の病理

疾患発生根本原因は人体の内部状態すなわち陰陽失調にあり、病因は疾病を引き起こす条件である。

どの様な疾病も、途中経過が千変万化の症候がみられても、
全ては邪正闘争と、陰陽失調のあらわれである。邪正闘争と陰陽失調は各疾病の経過に於いて同時に存在することが多い。
一般的には、外感病では邪正闘争が主体で、内傷雑病では陰陽失調が主体のことが多い。

1. 邪正闘争

外感病には風・寒・暑・湿・燥・火など外邪が必ず存在する。
外邪が人体を侵犯→正気の反抗→邪正闘争(邪正相搏)が主な病理である。

外感病で見られる悪寒(怕冷ハレイ)・発熱・ふるえ・発汗は邪正闘争を反映する。

普通、正気の防御能力が次第に病邪に打ち勝ち、疾病は好転し治癒する。しかし、ある条件下では、正気の防御能力が病邪に負けると疾病は悪化し時には死ぬ。それ故、疾病の予後は、

病邪と正気の関係と邪正闘争のあり方で決まる。
正勝邪退で疾病は治癒し、邪盛正衰では悪化する。
これには正確な治療が必要。

1.邪正闘争

1)正勝邪退

邪正闘争後病邪が衰弱、臓腑経絡の病理変化が修復され、気血の消耗も補償される。人体内部の陰陽・気血が新たな相対的平衡を得て、回復期に入り最終的に健康を回復する。

2)邪盛正衰

邪正闘争経過中に、正気が虚すか病邪が強盛で病邪が勝つ状態で、病邪による傷害が悪化し続け、正気抵抗力不足のため、人体の病理的損傷が進行する状態。

例えば、外感熱病経過で「亡陰」「亡陽」症候があるのは「正は邪に敵せず」を示し、危急状態を現す。

ただし危急状態であっても、全面的・詳細な分析と観察により、邪正闘争を人体の有利な方向へ転化させ救命すべきである。

3) その他

ある疾患経過では、「邪正相持」(邪と正気が拮抗)「邪去正傷」(邪も正気も傷つく)が生じ、急性から慢性へ移行したり何らかの後遺症を残し、速やかな回復がえられないことがある(急性肝炎後の慢性化)。このような状態の防止の為、或いは発生後は積極的処置を行うべきである。

邪正闘争が主体の疾病は、攻法を主とし病邪除去消滅が基本的治療原則である。扶正法を使うのは、病邪除去のため正気補助か、攻法を使用出来る状態を作り出すためであり、「祛邪存正」「扶正達邪」と称される(虚弱児の出来物は、補気して元気にして、切除する)。

たとえば解表・清熱・解毒・瀉下・消痰・化湿・利水・破瘀などは去邪のための方法で、邪正闘争が主体であるときに常用する治療法である。しかし、邪正闘争の経過中に、滋陰解表・益気利水などを去邪の為の補助手段として使用することもある。また「先補後攻」で「補」は「攻」を行いやすくする条件である。

???「邪去正衰」という状況になり邪正闘争が一段落した段階ではじめて、扶正法が主要治療原則になる。(下痢を伴う感冒で、感冒が難治の時、下痢を治して扶正後に、感冒治療)

第三節

疾患発生根本原因は人体の内部状態すなわち陰陽失調にあり、病因は疾病を引き起こす条件である。どの様な疾病も、途中経過が千変万化の症候がみられても、全ては邪正闘争と、陰陽失調のあらわれである。

邪正相争と陰陽失調は各疾病の経過に於いて同時に存在することが多い。一般的には、外感病では邪正闘争が主体で、内傷雑病では陰陽失調が主体のことが多い。

1. 邪正闘争

外感病には風・寒・暑・湿・燥・火など外邪が必ず存在する。外邪が人体を侵犯→正気の反抗→邪正闘争（邪正相搏）が主な病理である。

外感病で見られる悪寒（怕冷ハレィ）・発熱・ふるえ・発汗は邪正闘争を反映する。普通、正気の防御能力が次第に病邪に打ち勝ち、疾病は好転し治癒する。しかし、ある条件下では、正気の防御能力が病邪に負けると疾病は悪化し時には死ぬ。それ故、疾病の予後は、病邪と正気の力関係と邪正闘争のあり方で決まる。正勝邪退で疾病は治癒し、邪盛正衰では悪化する。これには正確な治療が必要。

1) 正勝邪退

邪正闘争後病邪が衰弱、臓腑経絡の病理変化が修復され、気血の消耗も補償される。人体内部の陰陽・気血が新たな相対的平衡を得て、回復期に入り最終的に健康を回復する。

2) 邪盛正衰

邪正闘争経過中に、正気が虚すか病邪が強盛で病邪が勝つ状態で、病邪による傷害が悪化し続け、正気抵抗力不足のため、人体の病理的損傷が進行する状態。例えば、外感熱病経過で「亡陰」「亡陽」症候があるのは「正は邪に敵せず」を示し、危急状態を現す。

ただし危急状態であっても、全面的・詳細な分析と観察により、邪正闘争を人体の有利な方向へ転化させ救命すべきである。

3) その他

ある疾患経過では、「邪正相持」「邪去正傷」が生じ、急性から慢性へ移行したり何らかの後遺症を残し、速やかな回復がえられないことがある。このような状態の防止の為、或いは発生後は積極的処置を行うべきである。

邪正闘争が主体の疾病は、攻法を主とし病邪除去消滅が基本的治療原則である。扶正法を使うのは、病邪除去のため正気補助か、攻法を使用出来る状態を作り出すためであり、「祛邪存正」「扶正達邪」と称される。

たとえば解表・清熱・解毒・瀉下・消痰・化湿・利水・破瘀などは去邪のための方法で、邪正闘争が主体であるときに常用する治療法である。しかし、邪正闘争の経過中に、滋陰解表・益気利水などを去邪の為の補助手段として使用することもある。また「先補後攻」で「補」は「攻」を行いやすくする条件である。

「邪去正衰」という状況になり邪正闘争が一段落した段階ではじめて、扶正法が主要治療原則になる。

2. 陰陽失調

陰陽失調とは、陰陽の消長・気血の生化・臓腑の連係といった体内の生理的活動が破壊された状態の総称。

発病性因子は体内の陰陽失調。

人体の生命活動は対立しつつ統一されており、気は血を行らすとともに統攝することも出来（脾気は統血する）、脾は昇を主り胃は降を主り、肝は疏泄を主り腎は閉蔵（陽気が閉塞し万物が皆閉塞する：腎が必須物質を漏らさないように納めること）を主り、肺は宣気して腎は納気するといった関係がある。

このように対立と統一がなければ生命もない。

この対立面を陰陽で代表させ、陰陽の相対的平衡によって全体が統一され、生命活動が維持されているととらえる。

この生理的活動が破壊されて病理的状态になると、正常な陰陽消長という相対的平衡の代わりに、陰陽の偏勝或いは偏衰という陰陽失調が生じ、疾病が発生する。

陰陽失調は全ての疾病の発生と経過に終始存在する。

しかし、外感病の発生と経過においては邪正闘争という病理が主体で、陰陽失調は主体ではない。

2. 陰陽失調

陰陽失調とは、陰陽の消長・気血の生化・臓腑の連係といった体内の生理的活動が破壊された状態の総称である。発病性因子は体内に陰陽失調がなければ疾病を形成することができない。

人体の生命活動は対立しつつ統一されており、気は血を行らすとともに統攝することも出来（脾気は統血する）、脾は昇を主り胃は降を主り、肝は疏泄を主り腎は閉蔵（陽気が閉塞し万物が皆閉塞する：腎が必須物質を漏らさないように納めること）を主り、肺は宣気して腎は納気するといった関係がある。このように対立と統一がなければ生命もない。この対立面を陰陽で代表させ、陰陽の相対的平衡によって全体が統一され、生命活動が維持されているととらえる。この生理的活動が破壊されて病理的状态になると、正常な陰陽消長という相対的平衡の代わりに、陰陽の偏勝或いは偏衰という陰陽失調が生じ、疾病が発生する。陰陽失調は全ての疾病の発生と経過に終始存在する。しかし、外感病の発生と経過においては、邪正相争という病理が主体で、陰陽失調は無いわけではないが主体ではない。

内傷雑病の発生には陰陽失調という病理が主体で、「心腎不交」「陰虛陽亢」などである。

陰陽失調には陰陽の調整として偏勝、偏衰を調えていく。

陰陽偏勝の情況は外感病でよく見られ、邪正闘争が属するので、去邪と扶正により調整する(陽偏盛→高熱に清熱薬)。

陰陽偏衰は内傷病でよく見られ、例えば陽虚には補陽、陰虚には補陰、血虚には養血、気虚には益気など適切な扶正法で調整する(更年期の女性ホルモン[陰]不足:陰偏衰→陰虚)。

疾病経過に於いて邪正闘争と陰陽失調の病理は、ある条件下では相互に転化する。

例えば、外感熱病では邪正闘争が主であるが、後期になると陽虚や陰虚が発生した段階では、陰陽失調が主体になる。

また、内傷雑病の脾虚や腎陽不足では陰陽失調が主病理であるが、脾虚生湿で痰が生じたり、腎陽虚で水液蒸化が出来ず水腫が発生すると、痰飲や水腫が病邪となって正気を傷害するので、邪正闘争が主体の病理に転化することになる(肝硬変で腹水)。

内傷雑病の発生には陰陽失調という病理が主体で、「心腎不交」「陰虚陽亢」などである。陰陽失調には陰陽の調整という方法を用いて偏勝、偏衰を調えていく。

陰陽偏勝の状況は外感病でよく見られ、邪正闘争の属するので、去邪と扶正により調整する。

陰陽偏衰は内傷病でよく見られ、例えば陽虚には補陽、陰虚には補陰、血虚には養血、気虚には益気など適切な扶正法で調整する。

疾病経過に於いて邪正闘争と陰陽失調の病理はある条件下では相互に転化する。例えば、外感熱病では邪正闘争が主であるが、後期になると陽虚や陰虚が発生した段階では、陰陽失調が主体になる。

また、内傷雑病の脾虚や腎陽不足では陰陽失調が主病理であるが、脾虚生湿で痰が生じたり、腎陽虚で水液蒸化が出来ず水腫が発生すると、痰飲や水腫が病邪となって正気を傷害するので、邪正闘争が主体の病理に転化することになる。
スライド①参照

邪正闘争には去邪と扶正を用いたが、陰陽失調には陰陽の調整をして偏勝あるいは偏衰を調節する。

陰陽偏勝の状況は外感病でよくみられ、邪正闘争に属するので、祛邪と扶正の方法で陰陽の偏勝を調節する。

(例えば、肺炎に清肺湯で効いた場合、実熱には黄芩、山梔子、竹茹など清熱剤で祛熱邪し、熱による傷陰に対し、天門冬で補陰して扶正するなど)

陰陽偏衰の情況は内傷病でよく見られ、どの面が偏衰しているかを把握したうえで、陽虚には補陽、陰虚には補陰、血虚には養血、気虚には益気など、適切に扶正し、陰陽の偏衰を調整する。

疾病の経過において邪正闘争と陰陽失調は固定不変ではなく、一定条件下相互に転化する。例えば、外感熱病での病邪と正気の戦いでは邪正闘争が主病理になっているが、後期になって陽虚や陰虚が発生した段階では陰陽失調が主体になる。また、内傷雑病の脾虚や腎陽不足では陰陽失調が主病理となるが、脾虚生湿や痰、飲が生じたり、腎陽虚で水液の蒸化が出来ずに水腫が発生すると、痰飲や水腫が病邪となって正気を傷害するので、邪正闘争が主体の病理に転化する。

陰陽失調症例：30才女性 160cm、42kg

現病歴：デパート店員。生来虚弱で冷え症。色白、物の味はあるが、
沢山は食べられない(脾気虚)。

ストレスがあると食欲が無くなる(肝旺乗脾)。

生来冷え症で特に手足が冷えやすい。

冬は手袋が欠かせない(腎陽虚)。

12月中旬、立ち仕事で1週間続き、疲労困憊の上、冷えたせいか
腰痛が起きてきた(腎陽虚悪化)。

食欲も無くなり、働く気が無くなってきた(脾腎陽虚)。

或日、会社帰りに買い物をしたが重いのが堪えた。

寒気がしていたのに無理をしたせいか、咽痛が起こり、乾咳が少し
あり、帰宅後起きていられなくなった。

翌日から、仕事を休む。生来尿回数が多いが、尿回数が減少。

顔面が浮腫傾向に気付いた。翌朝体重が稍増加(約600g)していた
(腎虚水沍)。腰のだるい痛みのため当院を受診した。

弁証：脾腎陽虚 **治法：**温脾温腎

処方：人参湯＋八味地黄丸(胃にこたえる人は又は、真武湯)

経過: 休息(3日間)と処方が奏功したせいか、3日後には尿量が増え、浮腫が減少し腰痛が軽快(10→4)していることに気がついた。それと共にいつもの頻尿傾向にもどったが、いつもより尿回数が減っている気がした(腎陽虚改善)。

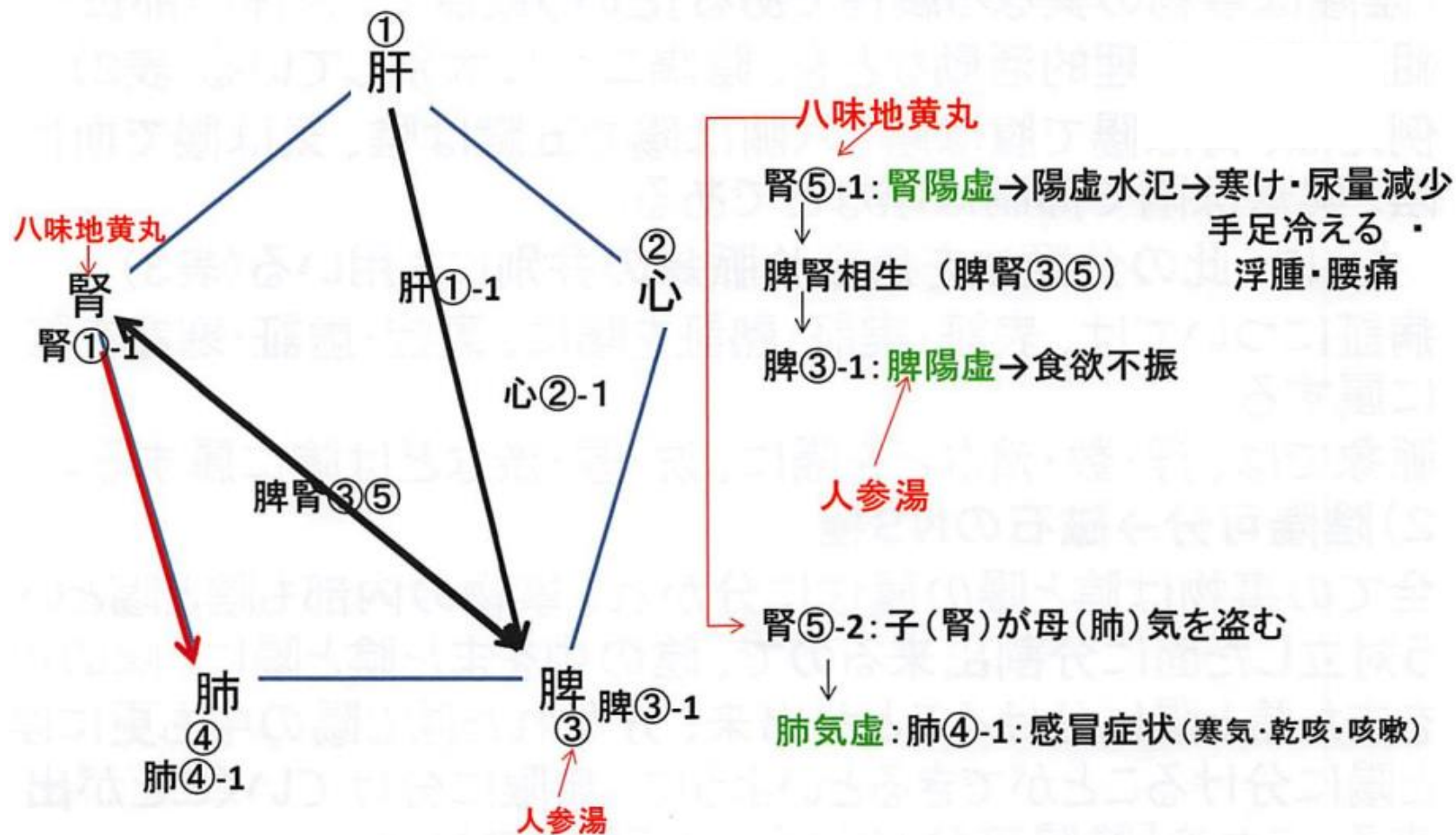
食欲も出てきた。寒気は消失した。余りに早く改善したので驚いたという。念のため漢方薬を続けながら、仕事に復帰。1週間後には諸症状消失し、すっかり回復。

考察: 脾腎陽虚の虚弱な人が、立ちっぱなしと言う腎に負担のかかることをして、腎の耗気を来した為、腰痛が起きたと考えられる。つまり一過性に腎虚が進み、脾腎相克ルートを通じて、脾腎陽虚の程度が進み、脾にも影響し、食欲が低下した。腎陽虚で陽虚水沅となり、水飲が発生して内部に停滞し尿量減少、浮腫傾向を呈した。

更には肺腎相生ルートを通じて、子(腎)が母(肺)の気を盗み、肺虚となり咽痛・乾咳が起きてきた。本人に確認すると、疲れると普段から風邪を引きやすく咽痛も起きやすいと ⇒⇒⇒次スライド

いうことで、何度も冷え・腰痛・感冒症状を経験している。
八味地黄丸で温腎し、陽虚水沍が改善して減っていた尿量が増え、腰痛が改善し、寒気がとれ、腎が母蔵の肺から気を盗む量が減少し、肺が元気になり、更には人参湯で温脾され脾陽気が増え、食欲が回復した。
又、脾肺相生ルートを通じて、脾陽気が補肺に貢献している。
脾腎陽虚の人は肺気虚になり易い傾向があるが、脾腎を治療すると、肺は速やかな回復を示す。つまり肺の特別な治療をしなくても、温補脾腎で補肺気したことになる。
五行理論の臨床利用には、五行理論の知識が役に立つ。
この例では、肺の薬をいくら投与しても治らない公算が強い。
補腎で治ることが多い。例えば、補肺薬で治らない咳が八味地黄丸で治ることはよく経験する。
ここで陰陽論で説明すると、脾腎陽虚は脾腎に陰(寒)が多い状態である。温補脾腎薬は脾腎の陽を増やして、陰(寒)を減らし、陰陽の比率を正常化させ治療している。

症例 2 30才女性 弁証:脾腎陽虚 治法:温補脾腎
 処方:人參湯+八味地黄丸



第五章 陰陽五行学説

陰陽学説と五行学説は中国の古代の自然観に基づいており、素朴な唯物論と自然発生的な弁証法の思想をそなえている。当時の天文・歴算・地理・農業・医学など自然科学は、全てこの影響を受けており、自然界の諸現象は全て此の観点で解釈していた。矛盾点もある。*

第一節 陰陽学説

陰陽学説は、古代人の長期にわたり観察した天地・日月・寒暑・男女・上下・内外・動静といった対立する自然現象から、得た概念に立脚。〈素問・陰陽応象大論〉に「陰陽は、天地の道なり」とある通りである。

1. 陰陽学説の基本的観点

宇宙に存在する全ての事物は陰か陽の属性を持ち、全事物の内部に陰と陽があり、陰陽間には相互依存・相互制約・相互転化の関係がある(表1)。中医学における陰陽学説には、以下のような五つの基本的観点が認められる。

第五章 陰陽五行学説

陰陽学説と五行学説は中国の古代の自然観に基づいており、素朴な唯物論と自然発生的な弁証法思想をそなえている。当時の天文・歴算・地理・農業・医学など自然科学は、全てこの影響を受けており、自然界の諸現象は全て此の観点で解釈していた。

*陰陽五行学説は、中医学の理論体系が形成・発展する過程に大きな影響を与えており、人体の生理・病理の認識や弁証論治に関連する理論によく用いられたが、これは批判的に継承していく必要がある。

第一節 陰陽学説

陰陽学説は、古代人の長期にわたって観察した天地・日月・寒暑・男女・上下・内外・動静といった対立する自然現象から、抽象して得た概念に立脚している。〈素問・陰陽応象大論〉に「陰陽は、天地の道なり」とある通りである。

1. 陰陽学説の基本的観点

陰陽学説では、宇宙に存在する全ての事物は陰か陽の属性を持ち、どのような事物の内部にも陰と陽の面があり、陰と陽の間には相互依存・相互制約・相互転化の関係があると見なしている（表1）。

中医学における陰陽学説には、以下のような五つの基本的観点が認められる。

1) 事物の属性としての陰陽

「陰陽は事物の異なる属性である」という観点で、人体の部位・組織構造・生理的活動などを、陰陽二つに大別している(表2)。例えば、背は陽で腹は陰、六腑は陽で五臓は陰、気は陽で血は陰、興奮は陽で抑制は陰などである。

さらに、此の分類法を病証や脈象の弁別にも用いる(表3)。病証については、表証・実証・熱証を陽に、裏証・虚証・寒証を陰に属する。

脈象では、浮・数・滑などを陽に、沈・遅・澁などは陰に属する。

2) 陰陽可分→磁石のNS極

全ての事物は陰と陽の属性に分かれ、事物の内部も陰と陽という対立した面に分割出来るので、陰の中をまた陰と陽に、陽の中をまた陰と陽に分けることが出来、分かれた陰と陽の中も更に陰と陽に分けることができるといふように、無限に分けていくことが出来る。これを「陰陽可分」という。以下テキストp4

1) 事物の属性としての陰陽

「陰陽は事物の異なる属性である」という観点で、人体の部位・組織構造・生理的活動などを、陰陽二つに大別している（表2）。例えば、背は陽で腹は陰、六腑は陽で五臓は陰、気は陽で血は陰、興奮は陽で抑制は陰などである。

さらに、此の分類法を病証や脈象の弁別にも用いる（表3）。病証については、表証・実証・熱証を陽に、裏証・虚証・寒証を陰に属する。脈象では、浮・数・滑などを陽に、沈・遅・洪などは陰に属する。

2) 陰陽可分

全ての事物は陰と陽の属性に分かれ、事物の内部も陰と陽という対立した面に分割出来るので、陰の中をまた陰と陽に、陽の中をまた陰と陽に分けることが出来、分かれた陰と陽の中も更に陰と陽に分けることができるといのように、無限に分けていくことが出来る。これを「陰陽可分」という。

〈素問・陰陽離合論〉に「陰陽はこれを数えて十なるべく、これを推して百なるべし、これを数えて千なるべく、これを推して万なるべし、万の大も、勝げて数うべからず、然してその要は一なり」とあるのが「陰陽可分」を説明するものである。

この陰陽可分の観点が、人体の組織構造・生理的機能・病理的变化・弁証論治などに広く用いられている。

表1 事物の陰陽の属性の例

分類	空間	時間	季節	性別	温度	重量	事物の運動状態		
陽	天	昼	春・夏	男	熱	軽	上昇	外向	明白な運動
陰	地	夜	秋・冬	女	寒	重	下降	内向	相対的静止

表2 人体の部位・組織構造・生理活動などの陰陽

分類	人体の部位		組織構造		機能活動状態				病証	
陽	表	背 上部	皮毛	六腑	気	衛	興奮	亢進	表証	熱証
陰	裏	腹 下部	筋骨	五臓	血	營	抑制	衰退	裏証	寒証

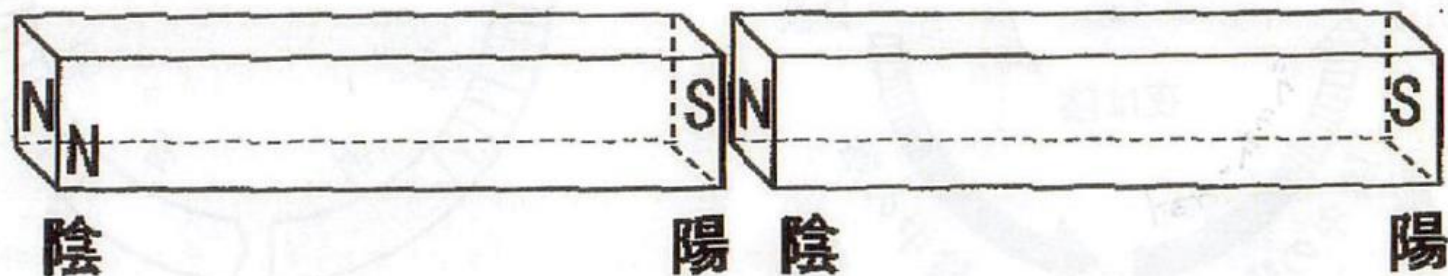
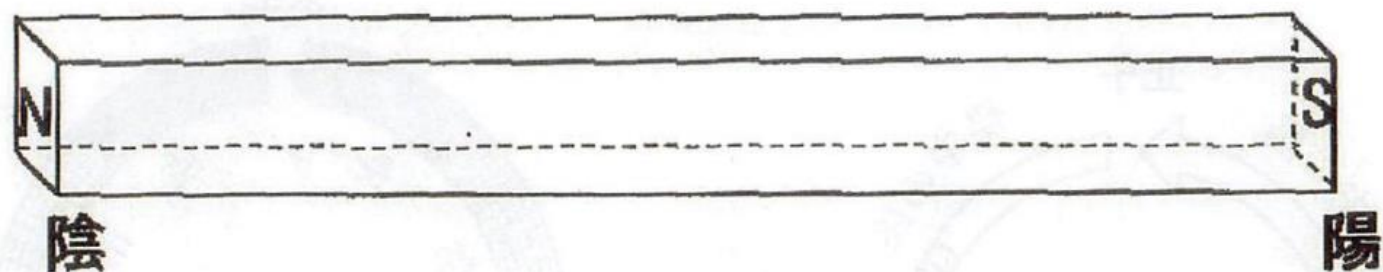
又、物質は陰、機能は陽に属する(血液は陰、血流は陽)

表3 脈証の陰陽

脈象						病証		
陽	浮脈	数脈	滑脈	実脈	洪大	表証	実証	熱証
陰	沈脈	遅脈	澁脈	虚脈	細小	裏証	虚証	寒証

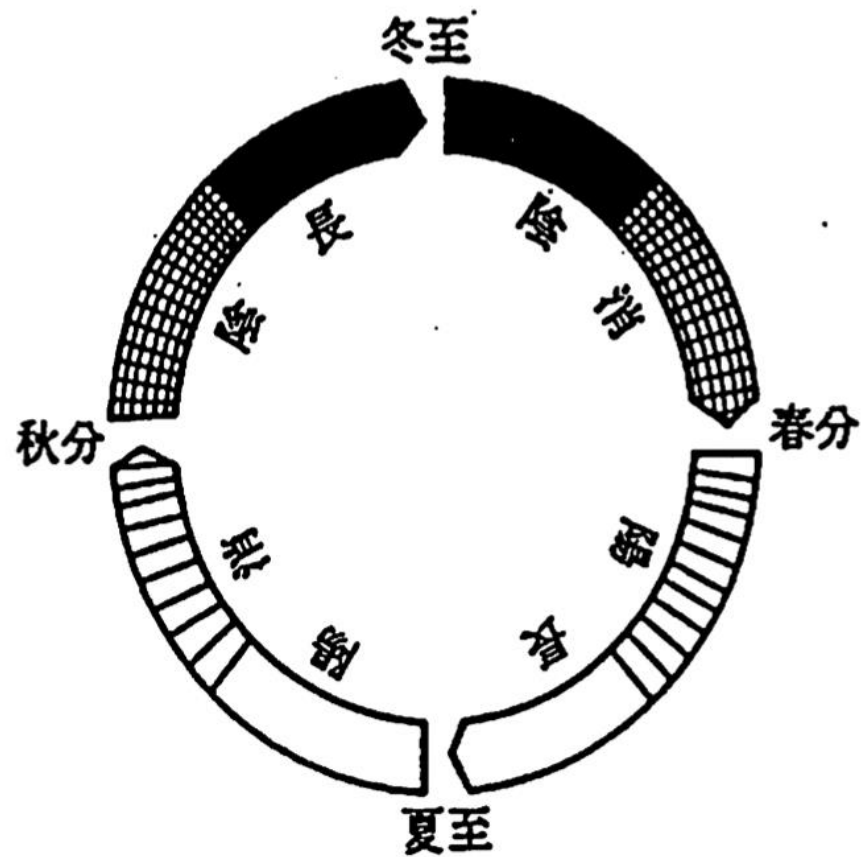
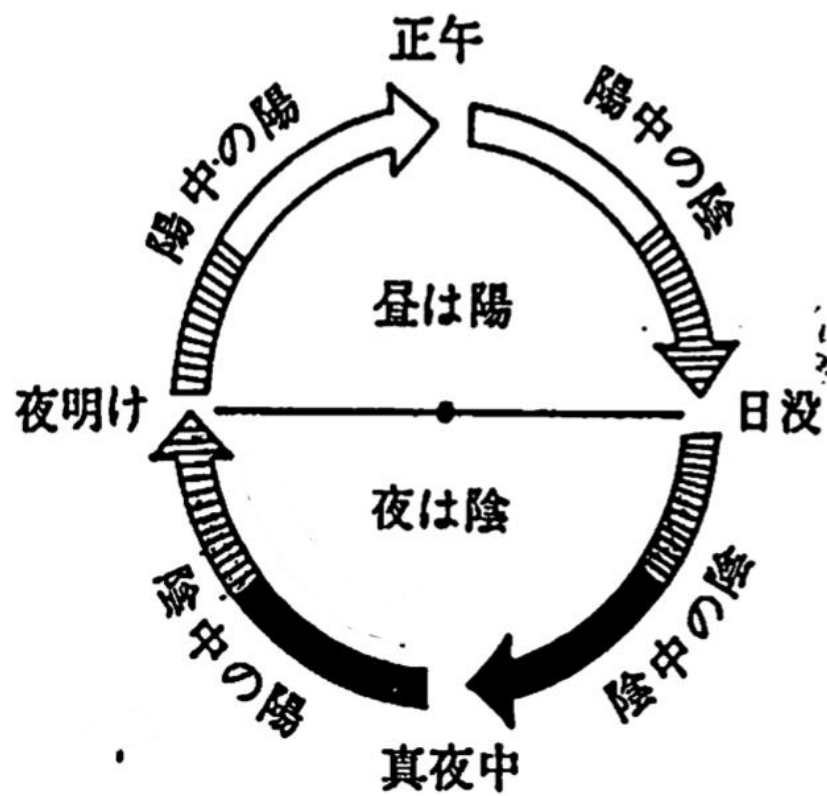
虚脈・関・尺3部で浮取・中取・沈取ともに無力
濡脈: 浮細・無力
弱脈: 沈細・無力
微脈: 極細・無力
散脈: 浮大・極無力
芤脈: 浮大・中空
革脈: 浮やや細・有力・中空
動脈: 滑数・短・有力
牢脈: 沈弦大・長有力

棒磁石から無数の棒磁石が出来る



人体の組織構造の陰陽区分表

組織構造		陽	陰
部 位		上 部 体 表 背 部 外 側	下 部 体 内 腹 部 内 側
臓 腑	臓と腑	六 腑	五 臓
	臓と臓	<u>心 肺</u>	<u>肝脾腎</u>
	臓内部	<u>心 陽</u> <u>腎 陽</u>	<u>心 陰</u> <u>腎 陰</u>



3) 陰陽互根

陰と陽の間に相互依存・相互資生の関係があることを意味する。陰は陽に、陽は陰に依存することを、「陽は陰に根ざし、陰は陽に根ざす」「陰無くばすなわち陽はもって化することなく、陽無くばすなわち陰はもって生ずることなし」「孤陰は生ぜず、独陽は長ぜず」「陰と陽は分かつべくして離すべからず」などと述べている。中医学では此の観点が生理・病理・治療などに広く応用されている。

氣と血は陰陽互根を具体的に示している。

氣と血は人体の基本物質。氣は陽で血は陰であり、血は、氣が水穀の精微を運化して生成されるので「氣はよく血を行らす」と称され、氣の固摂作用によって脈管外に溢出しないので「氣は血を摂す」と言う。

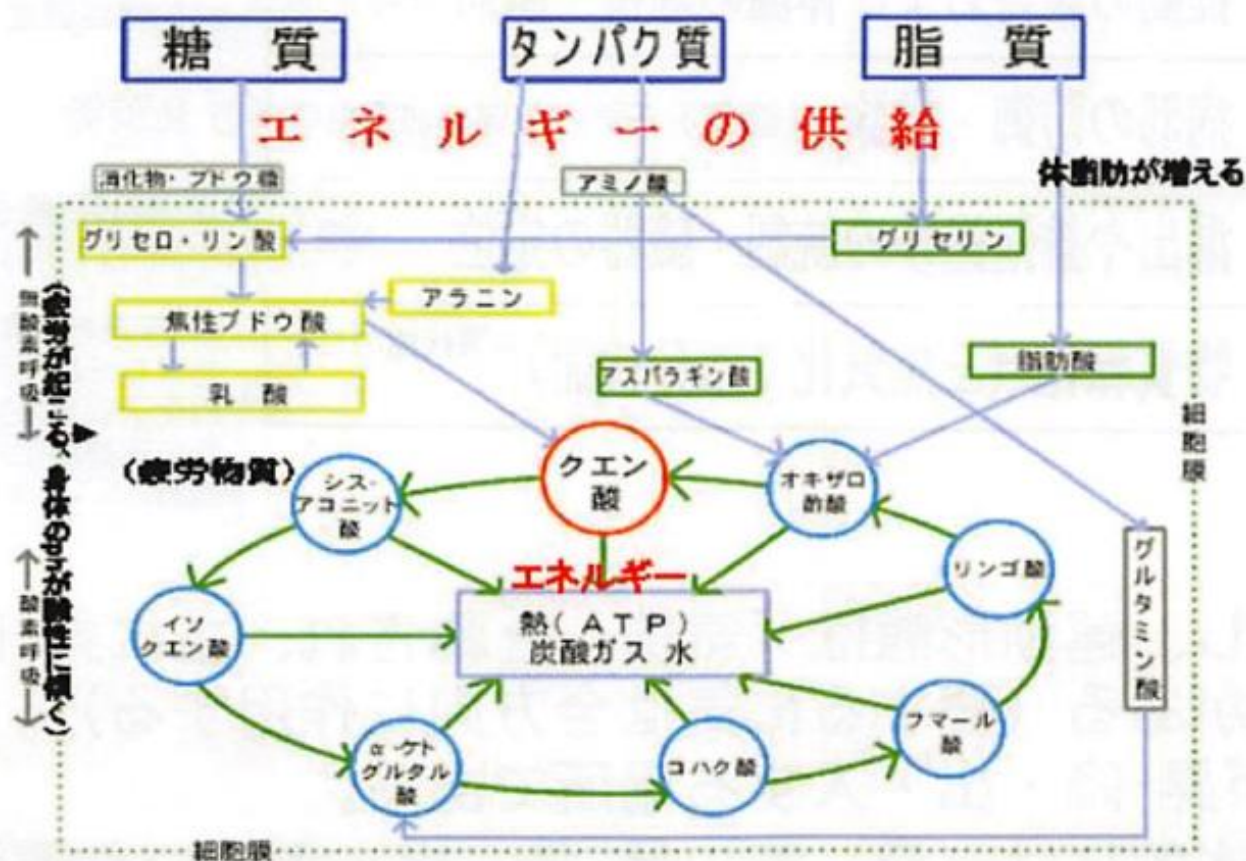
このように、氣は生血・行血・摂血の効能を持つところから、「氣は血の帥たり」と称される。一方、氣は血によって十分栄養を供給され機能するので、「氣は血に舍る」「血は氣の母たり」と言われる。

クエン酸サイクル

毎日摂取した栄養分が、細胞内のミトコンドリアで循環し、エネルギー（ATP）と二酸化炭素、水に変換していくサイクル

毎日の食物は、次のように体内で分解されます。

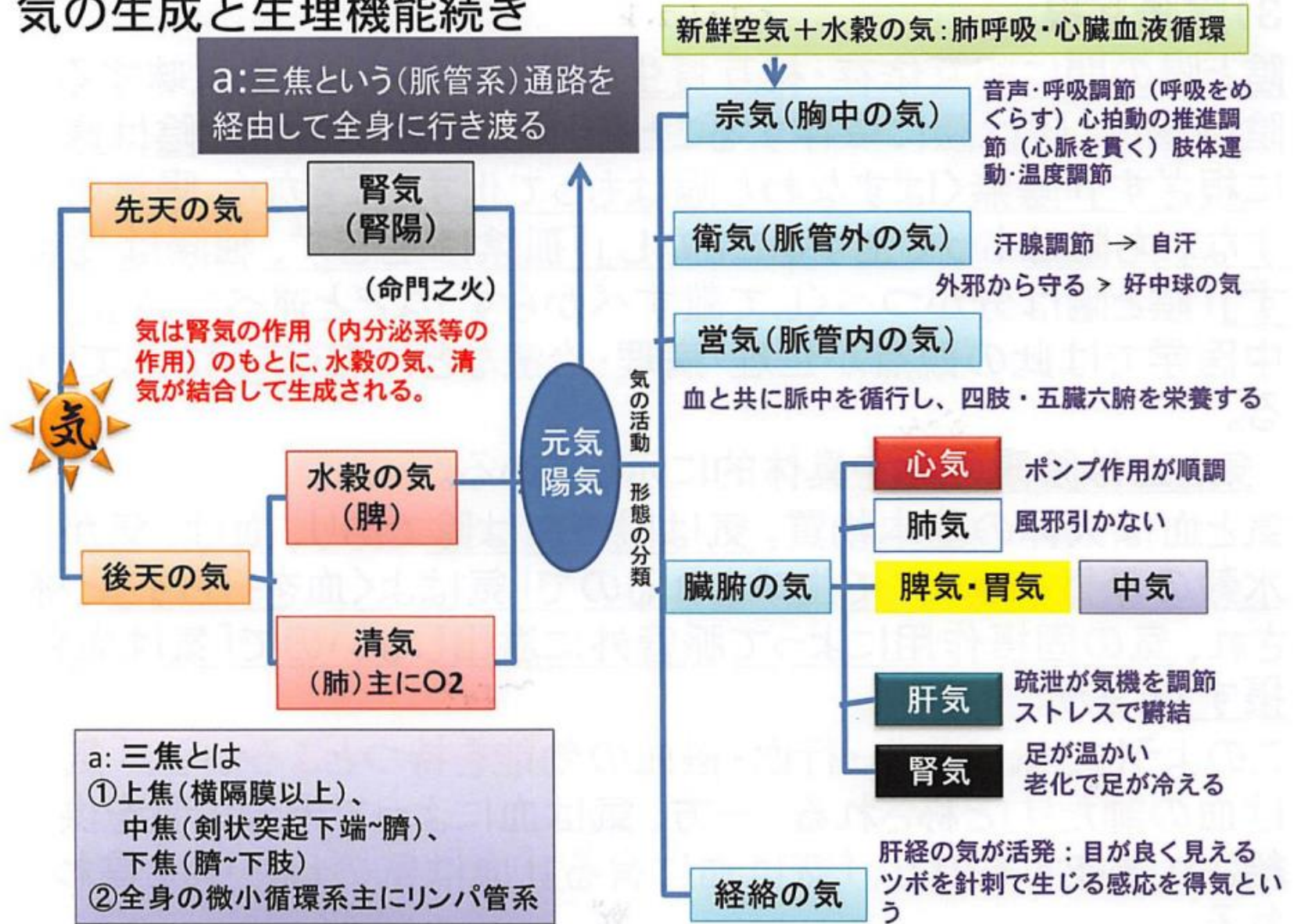
三大栄養素



→ 血の働き

→ 気の働き

気の生成と生理機能続き



気の作用の分類

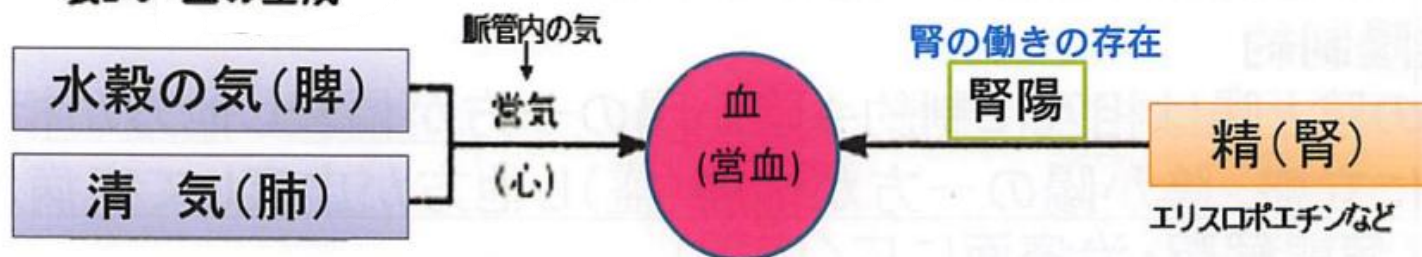
気	推动作用	生長・発育・生理的機能・代謝の推進	
	温煦作用	推动の維持および体温の維持・調節（腎気）	気があれば代謝熱が発生
	防御作用	病邪の防御・排除（衛気）正気と外邪の邪正相争	免疫能
	固摄作用	漏出や排泄過多の統制・臓器の定位	（子宮・臓器下垂を防ぐ） 血液が脈外に漏れない
	気化作用	物質転化（三焦気化：水分代謝） 物質代謝のこと	血・津液を飲食物から化生し汗尿に変化。 消化吸收ガス交換。 気を運動変化させる能力

代謝熱

気は全身に存在し、運動形態は「気機」と称され、主に昇・降・出・入の四形式がある（要するに気は全方向に作用する）。
 臓腑・経絡は気が昇・降・出・入する場所である。
 生命活動は、根本的には（元）気の昇・降・出・入という運動である。運動の停止で死。気の運動形態を気機という。

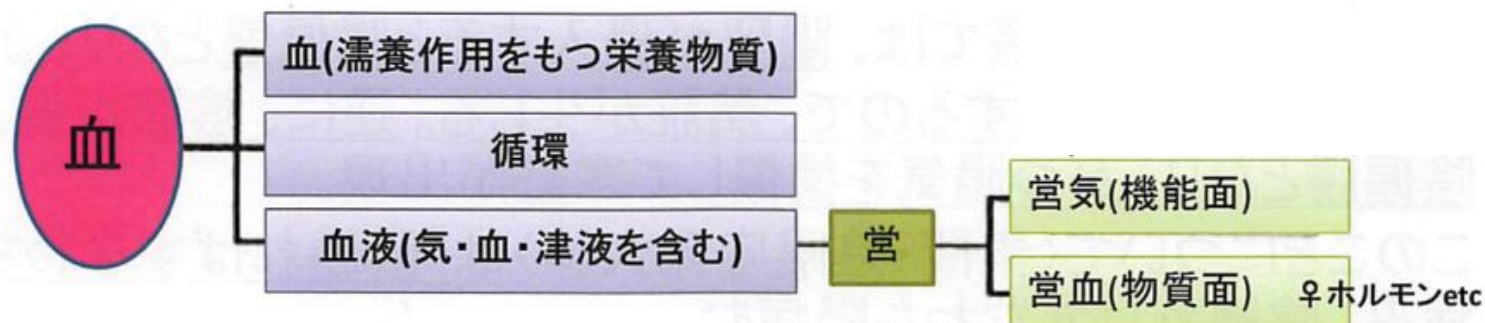
血とは・・・？

表2-3 血の生成



視床下部以下から分泌される
下垂体・甲状腺・副腎ホルモン等
全て→腎精腎陰ともいう
腎精が働くことを腎陽があるという

表2-4 血の意味の違い



臨機応変に、血がどれを意味するかを考える

このように気と血は相互に依存するので、血虚の治療においては、「気はよく血を生ず」の観点で、気血双補という治法を用いる。また大出血のときには「気は血に随いて脱す」という状況が→治療は「血脱はまずその気を益す」ということが必要で、補気して生血(大出血・重症嘔吐・下痢・心不全に独参湯)。

同じく、気虚の治療に、養血の薬物を配合→気が血の濡養を得て補気される(過労に十全大補湯)。

疾病の経過中に見られる「陰損及陽」や「陽損及陰」も、陰陽互根の具体的現れである。

陽虚が進行すると「陽なくばすなわち陰はもって生ずることなし」で、陰液の生成が不可となり陰虚が出現するので、「陽損及陰」という(慢性腎炎は一般に陽虚を呈し、陽虚のために水液を蒸化できないので水腫が生じるが、陽虚が一定の程度になると陰液の化生ができなくなり、陰虚の面があらわれる)。

同様に、陰虚が進行すると、「陰無くばすなわち陽をもって化することなし」で、陽気も不足して陽虚が発生「陰損及陽」

(例: 高血圧症は一般に陰虚陽亢を呈するが、経過が長びき陽も虚す→陰陽両虚→腎陽虚となり冷える。老人の高血圧症に多いが、八味地黄丸で補腎陰陽をはかると改善。)

4) 陰陽制約

人体の陰と陽は相互に制約→陰か陽の一方が偏衰し他方が相対的に亢盛、陰か陽の一方が偏勝(盛)し他方が虚衰して疾病が発生(病態解釈・治療面に広く応用)。

生理的には、肝陰は肝陽を制約して肝陽上亢を阻止。
肝陰が不足して肝陽を制約不可となると、肝陽上亢が発生(ストレスで高血圧)。

病邪と人体の関係では、陽邪が侵入すると陽偏盛となり、かつ体内の陰液を消耗するので、熱証が生じる。逆に、陰邪が侵入で陰偏勝となり、かつ陽気を損傷して寒証が出現。

このことについて〈素問・陰陽応象大論〉は「陽勝ればすなわち陰病み、陰勝ればすなわち陽病む。

陽勝ればすなわち熱し、陰勝ればすなわち寒ゆ」と述べている。

3) 陰陽互根

陰陽互根とは、陰と陽の間に相互依存・相互資生の関係があることを意味する。陰は陽に、陽は陰に依存することを、「陽は陰に根ざし、陰は陽に根ざす」「陰無くばすなわち陽はもって化することなく、陽無くばすなわち陰はもって生ずることなし」「孤陰は生ぜず、独陽は長ぜず」「陰と陽は分かつべくして離すべからず」などと述べている。中医学では此の観点が生理・病理・治療などに広く応用されている。

気と血の相互関係は、陰陽互根を具体的に示している。気は陽で血は陰であり、気と血は人体の基本物質を組成している。血は、気が水穀の精微を運化することにより生成されるので「気はよく血を行らす」と称され、気の固摂作用によって脈管外に溢出することがないので「気は血を摂す」と言われる。このように、気は生血・行血・摂血の効能を持つところから、「気は血の帥たり」と称される。一方、気は血によって十分に栄養を供給されてはじめて機能するので、「気は血に舍る」「血は気の母たり」と言われる。このように気と血は相互に依存しているので、血虚の治療においては、「気はよく血を生ず」の観点で、気血双補という治法をよく用いる。また大出血のときには「気は血に随いて脱す」という状況が生ずるので、治療上は「血脱はまずその気を益す」ということが必要で、気をおぎなうことによって血を生じさせることができる。同じく、気虚の治療においては、適当に養血の薬物を配合すると、気が血の濡養を得ることになり補気が有効になる。

疾病の経過に見られる「陰損及陽」や「陽損及陰」も、陰陽互根の具体的現れである。

陽虚の病証では、陽虚が一定の段階に達すると、「陽なくばすなわち陰はもって生ずることなし」で、陰液の生成が出来なくなって陰虚が出現するので、「陽損及陰」という。例えば、慢性腎炎は一般に陽虚を呈し、陽虚のために水液を蒸化できないので水腫が生じるが、陽虚が一定の程度になると陰液の化生ができなくなり、陰虚の面があらわれる。

同様に、陰虚の病症でも、陰虚が一定程度に達すると、「陰無くばすなわち陽をもって化することなし」で、陽気も不足して陽虚が発生するので「陰損及陽」というのである。例えば、高血圧症は一般に陰虚陽亢を呈するが、経過が長びいて病状が悪化すると陽も虚してきて、陰陽両虚があらわれて、腎陽虚となり冷えが目立つようになる。

老人の高血圧症に多いが、八味地黄丸で補腎陰陽をはかると改善する。

4) 陰陽制約

人体の陰と陽は相互に制約しているので、陰か陽の一方が偏衰するともう一方が相対的に亢盛となり、陰か陽の一方が偏勝（盛）するともう一方が虚衰する。このように陰陽の正常な相互制約の関係が失調すると、偏勝あるいは偏衰の状況があらわれて疾病が生じる。

陰陽制約の観点は、中医学の生理・病理や病邪と人体の関係の解釈および治療面に広く用いられている。

生理的には、肝陰は肝陽を制約して肝陽を上亢させない。病的には肝陰が不足して肝陽を制約できなくなると、肝陽上亢が発生する。

病邪と人体の関係では、陽邪が侵入すると陽偏盛となり、かつ体内の陰液を消耗するので、熱証が生じる。逆に、陰邪が侵入すると陰偏勝となり、かつ陽気を損傷するので、寒証があらわれる。このことについて〈素問・陰陽応象大論〉は「陽勝ればすなわち陰病み、陰勝ればすなわち陽病む。陽勝ればすなわち熱し、陰勝ればすなわち寒ゆ」と述べている。

治療：熱邪による病態には涼性・寒性薬物を使用、「寒はよく熱を制す」といい、寒邪による病態には温性・熱性の薬物を使用して陽薬（附子）で陰邪（足冷え）を制約する、「熱は寒に勝つべし」という。「熱はこれを寒し、寒はこれを熱す」という治療原則に相当し、陰か陽が偏勝した実証に用いる方法。

一方、陰か陽の偏衰した場合、他方を制約不可となり相対的亢盛となる。例えば陰虚陽亢・虚熱などが生じたときは、陰虚が本質で、単に瀉火清熱の方法を使わないで、滋陰降火・育陰潜陽などの方法を使用してはじめて陽亢を制約出来る。

これについて先人は、「これを寒して寒えざるは、これ水無きなり」「水の主を壮にして、もって陽光を制す」と指摘（補陰清熱症例）（更年期女性のぼせに、加味逍遥散→補陰補血の当帰・芍薬＋牡丹皮・山梔子の清熱）

逆に陽虚のために陰を制約できず、不消化下痢（下利清穀）・夜明け前の下痢（五更泄瀉）・水腫などの「陰寒内盛」（陽虚水沍）があらわれたときは、陽虚が本質→寒邪を駆散は不可、⇒⇒

陽気の不足を補益すべき→助陽(鹿茸・杜仲など)・益火(補腎陽)・補気等を用いる。「これを熱して熱からざるは、これ火なきなり」「火の源を益し、もって陰翳を消す」と認識。

なお陰陽制約のなかでも、「陰陽消長」と陰陽の「偏勝・偏衰」には、区別と関連性があることを認識すべきである。

「陰陽消長」は、正常な状態において、陰と陽が静止不変の絶対的平衡状態にあるのではなく、**生理的な範囲内で変動**していることを指す。気・血・津液が生成して代謝され、五臓が精気を蔵し六腑が物を伝化するのは、絶え間ない「陰消陽長」と「陽消陰長」の過程において相対的平衡が維持されていることによる。

一方、陰陽の「偏勝・偏衰」は正常な相対的平衡が破壊されて自己調整が出来ない「陰陽失調」に相当(疾病の発生する根本的原因)。(動悸に炙甘草湯が効いていた人が、加齢と共に効かなくなる→偏衰である心気虚に対し、炙甘草湯の助けを借りても、自己調整負荷となった→

他に原因→牛黄……etc

治療面では、熱邪による病態には涼性・寒性薬物を使用、「寒はよく熱を制す」といい、寒邪による病態には温性・熱性の薬物を使用して陽薬（附子）で陰邪（足冷え）を制約する、「熱は寒に勝つべし」という。「熱はこれを寒し、寒はこれを熱す」という治療原則に相当し、陰か陽が偏勝した実証に用いる方法である。

一方、陰か陽の偏衰による場合、一方が不足しているため相対する別の一方を制約することができず、別の一方が相対的亢盛となる。例えば陰虚のために陽気を制約できず陽亢・虚熱などが生じたときは、陰虚が本質であるから、単に瀉火清熱の方法を使わないで、陰液不足を補うべきで、滋陰降火・育陰潜陽などの方法を使用してはじめて陽の相対的亢進を制約出来る。これについて先人は、「これを寒して寒えざるは、これ水無きなり」「水の主を壮にして、もって陽光を制す」と指摘している（補陰清熱症例）

逆に陽虚のために陰を制約できず、不消化下痢（下利清穀）・夜明け前の下痢（五更泄瀉）・水腫などの「陰寒内盛」（陽虚水氾）があらわれたときは、陽虚が本質であるから、単純な寒邪を駆散する治法を用いることができず、陽気の不足を補益すべきで、助陽（鹿茸・杜仲など）・益火（補腎陽）・補気などの方法を用いて始めて陰寒を消散させることが出来る。このことは「これを熱して熱からざるは、これ火なきなり」「火の源を益し、もって陰翳を消す」と認識されている。

なお陰陽制約のなかでも、「陰陽消長」と陰陽の「偏勝・偏衰」には、区別と関連性があることを認識すべきである。

「陰陽消長」は、正常な状態において、陰と陽が静止不変の絶対的平衡状態にあるのではなく、生理的な範囲内で変動していることを指す。気・血・津液が生成して代謝され、五臓が精気を蔵し六腑が物を伝化するのは、絶え間ない「陰消陽長」と「陽消陰長」の過程において相対的平衡が維持されていることによる。一方、陰陽の「偏勝・偏衰」は正常な相対的平衡が破壊されて自己調整が出来ないことを指し、「陰陽失調」に相当するもので、疾病の発生する根本的原因でもある。

5)陰陽転化

主に疾病の症候の変化を表す観点で陰証(新陳代謝低下傾向)と陽証(熱性病で体温上昇・神経系の興奮・体温上昇を伴う状態＝熱)が相互に転化。

具体的には寒証が熱証に、虚証が実証に変化すること。

同様に陽証から陰証への転化とは、熱証が寒証に、実証が虚証に変化することである。

(急性黄疸型の伝染性肝炎では、急性期には黄疸・発熱・悪心・嘔吐・脇痛・食欲不振(納呆)・舌苔が厚・などの肝胆湿熱の実証を呈する→遷延して元気がない(神疲)・無力感・頭のふらつき・目まい・胸脇部の鈍痛・食べ物の味がない(納穀不香)・舌質が暗紅などの虚証を呈する。→実証から虚証への転化。

病状が更に進み、肝硬変から水湿の停滞による腹水が生じて胸や腹の膨満などがみられる→虚証から実証に転化。ただし、初期は邪気が盛んで正気も衰えていない実証であるのに対し、晩期は邪気が盛んで正気が衰弱している虚体実証である)。

5) 陰陽転化

陰陽転化は、主に疾病の症候の変化を表す観点で、陰証（新陳代謝低下傾向）と陽証（熱性病で体温上昇・神経系の興奮・体温上昇を伴う状態、熱ともいう）が相互に転化することを示す。陰証から陽証への転化とは、具体的には寒証が熱証に、虚証が実証に変化することである。同様に陽証から陰証への転化とは、熱証が寒証に、実証が虚証に変化することである。

例えば急性黄疸型の伝染性肝炎では、急性期には黄疸・発熱・悪心・嘔吐・脇痛・食欲不振（納呆）・舌苔が厚・などの肝胆湿熱の実証を呈するが、遷延すると元気がない（神疲）・無力感・頭のふらつき・目まい・胸脇部の鈍痛・食べ物の味がない（納穀不香）・舌質が暗紅などの虚証を呈するようになる。これは実証から虚証への転化である。病状が更に進み、肝硬変から水湿の停滞による腹水が生じて胸や腹の膨満などがみられるようになると、虚証から実証に転化したことになる。ただし、このときの実証は初期の実証とは異なる。初期は邪気が盛んで正気も衰えていない実証であるのに対し、晩期は邪気が盛んで正気が衰弱している虚体実証である。

これら転化の様々な変遷は、人体の抵抗力の強弱・病邪の性質の違い・治療方法の差異などの条件によって発生するということである。

(例えば、気管支喘息では気道感染を反復することによって元来の寒哮が熱哮に変化することが多く、急性腎盂炎では治療の不徹底・細菌の薬物抵抗性・反復発作などによって元来の下焦湿熱の実証が腎陰不足・陰虛火旺の虚熱証に転化し、甚だしければ腎陽虚の虚寒証にまで転化する。)

指摘しておく必要があるのは、実証から熱証への転化・熱証から寒証への転化・虚証から実証への転化・実証から虚証への転化などの様々な変遷は、人体の抵抗力の強弱・病邪の性質の違い・治療方法の差異などの条件によって発生するということである。

例えば、気管支喘息では気道感染を反復することによって元来の寒哮が熱哮に変化することが多く、急性腎盂炎では治療の不徹底・細菌の薬物抵抗性・反復発作などによって元来の下焦湿熱の実証が腎陰不足・陰虚火旺の虚熱証に転化し、甚だしければ腎陽虚の虚寒証にまで転化する。

このように、疾病の症候の転化には一定の条件が必要であり、一定の条件がそろわないときには転化することはない。

2. 陰陽学説の具体的応用

1) 組織構造の解釈

人体は一個の統一体であるが、全ての組織構造を陰陽の両面から分析することが出来る。

一般には、上部は陽に下部は陰に、体表は陽に体内は陰に、体表も背面も陽に腹面は陰にそれぞれ属している。六腑は陽に五臓は陰に属する。

〈素問・金匱真言論〉に「それ人の陰陽をいえば、すなわち外は陽たり、腹は陰たり。

人身の臓腑中の陰陽をいえば、すなわち臓は陰たり、腑は陽たり。

肝・心・脾・肺・腎の五臓はみな陰たり、胆・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦の六腑はみな陽たり」とあるごとくである。臓腑の内部も陰陽に分けること可。心は心陰と心陽、腎は腎陰と腎陽がある。

人体の気血を陰陽に分けると、気は陽に血は陰に属する。
経絡に分けると、背面・四肢外側を循行するのが陽経で、腹面・
四肢内側を循行するのが陰経である。

以上をふまえて、〈素問・宝命金形論〉は「人生まれ形あるは、
陰陽を離れず」と説いている。

2. 陰陽学説の具体的応用

1) 組織構造の解釈

人体は一個の統一体であるが、全ての組織構造を陰陽の両面から分析することが出来る。

一般には、上部は陽に下部は陰に、体表は陽に体内は陰に、体表も背面も陽に腹面は陰にそれぞれ属している。六腑は陽に五臓は陰に属する。

〈素問・金匱真言論〉に「それ人の陰陽をいえば、すなわち外は陽たり、腹は陰たり。人身の臓腑中の陰陽をいえば、すなわち臓は陰たり、腑は陽たり。肝・心・脾・肺・腎の五臓はみな陰たり、胆・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦の六腑はみな陽たり」とあるごとくである。臓腑の内部も陰陽に分けることができ、心には心陰と心陽が、腎にも腎陰と腎陽があるなどである。

人体の気血を陰陽に分けると、気は陽に血は陰に属する。経絡に分けると、背面・四肢外側を循行するのが陽経で、腹面・四肢内側を循行するのが陰経である。

以上をふまえて、〈素問・宝命金形論〉は「人生まれ形あるは、陰陽を離れず」と説いている。

2) 生理的機能の解釈

各種の生理的機能を昇・降・出・入という4種の運動形式として把えて、体内の気血・臓腑・経絡間の相互関係を説明。昇・出が陽、降・入が陰に属する。

生理的活動過程も体内の陰陽消長の変化の過程と考える。

〈素問・陰陽応象大論〉に「清陽は上竅より出で、濁陰は下竅より出づ。清陽は湊理を発し、濁陰は五臓に走く。

清陽は四肢を實し、濁陰は六腑に帰す」とあるのは、陽は体内の軽清の気で、清竅も上昇し皮膚・肌表に外出し四肢を充実させ、陰は体内の重濁の気で、その精微が五臓に内流し全身を充養し、糟粕が二便として体外に排出。

ということを説明している

この昇・降・出・入という4種の運動形式は相互依存・相互作用している<素問・陰陽応象大論>「陰は内にあり、陽の守りなり。陽は外にあり、陰の使いなり」。

3) 病理的変化の解釈

人体の病理的変化を陰陽失調とし、邪と正も陰陽により分析。「邪」は陰邪と陽邪に分けられる。

陰偏勝を形成→寒盛(実寒)、陽偏盛を形成して実熱(熱盛)を呈する。

「正」は陽気と陰液の両面を含み、陽気の虚では虚寒が、陰液の虚では虚熱があらわれる。

以上、多種多様の病理変化は「陰勝ればすなわち寒、陽勝ればすなわち熱、陰虚すればすなわち熱、陽虚すればすなわち寒」の四句に概括できる。

根本原因は陰陽失調であり、偏勝か偏衰による病態である。

2) 生理的機能の解釈

各種の生理的機能を昇・降・出・入という4種の運動形式として把えて、体内の気血・臓腑・経絡間の相互関係を説明しており、陰陽の属性からすると、昇・出が陽、降・入が陰に属する。生理的活動の過程も体内の陰陽消長の変化の過程と考えており、〈素問・陰陽応象大論〉に「清陽は上竅より出で、濁陰は下竅より出づ。清陽はは濇理を発し、濁陰は五臓に走く。清陽は四肢を實し、濁陰は六腑に帰す」とあるのは、陽は体内の軽清の気で、清竅も上昇し皮膚・肌表に外出し四肢を充実させ、陰は体内の重濁の気で、その精微が五臓に内流し全身を充養し、その糟粕が二便として体外に排出されることを説明している。

なお、この昇・降・出・入という4種の運動形式は相互依存・相互作用している〈素問・陰陽応象大論〉「陰は内にあり、陽の守りなり。陽は外にあり、陰の使いなり」。

3) 病理的変化の解釈

人体の病理的変化を陰陽失調として解釈し、邪と正も陰陽により分析。

「邪」は陰邪と陽邪に分けられる。陰邪病態は陰偏勝を形成して寒盛（実寒）、陽邪病態は陽偏盛を形成して実熱（熱盛）を呈する。

「正」は陽気と陰液の両面を含み、陽気の虚では虚寒が、陰液の虚では虚熱があらわれる。以上、多種多様の病理変化は「陰勝ればすなわち寒、陽勝ればすなわち熱、陰虚すればすなわち熱、陽虚すればすなわち寒」の四句に概括できる。根本原因は陰陽失調であり、偏勝か偏衰による病態である。

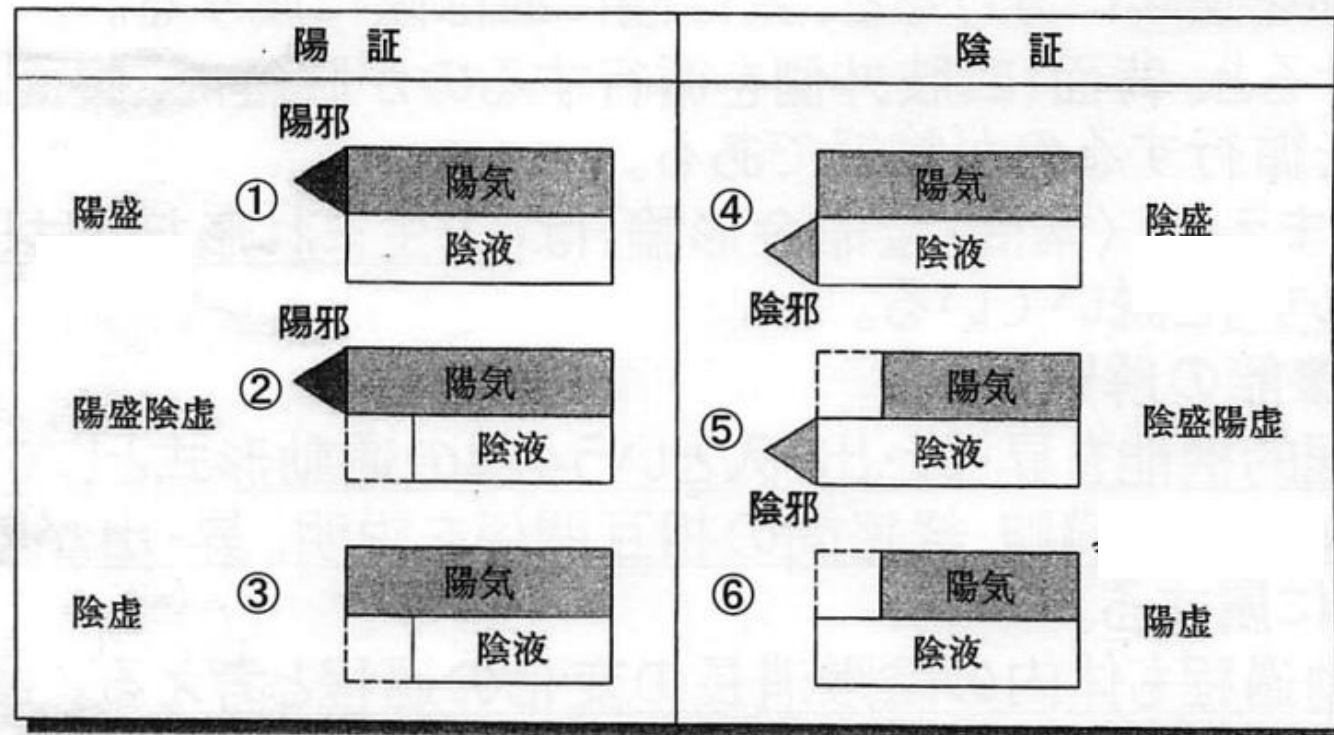


図2-15 4種の陰陽の関係

- ① 元気な人が風邪をうつされ発熱
- ② 高熱が続き、口渴・空咳
- ③ 解熱したが、乾咳・口内乾燥感残る。
- ④ 寒邪にあたり体が冷えたが著変無し。
- ⑤ 脾気虚で下利をした(食欲低下→脾気・陽虚→生湿)
- ⑥ 冷えたが病気ではない。(近い将来、感冒罹患の可能性。)

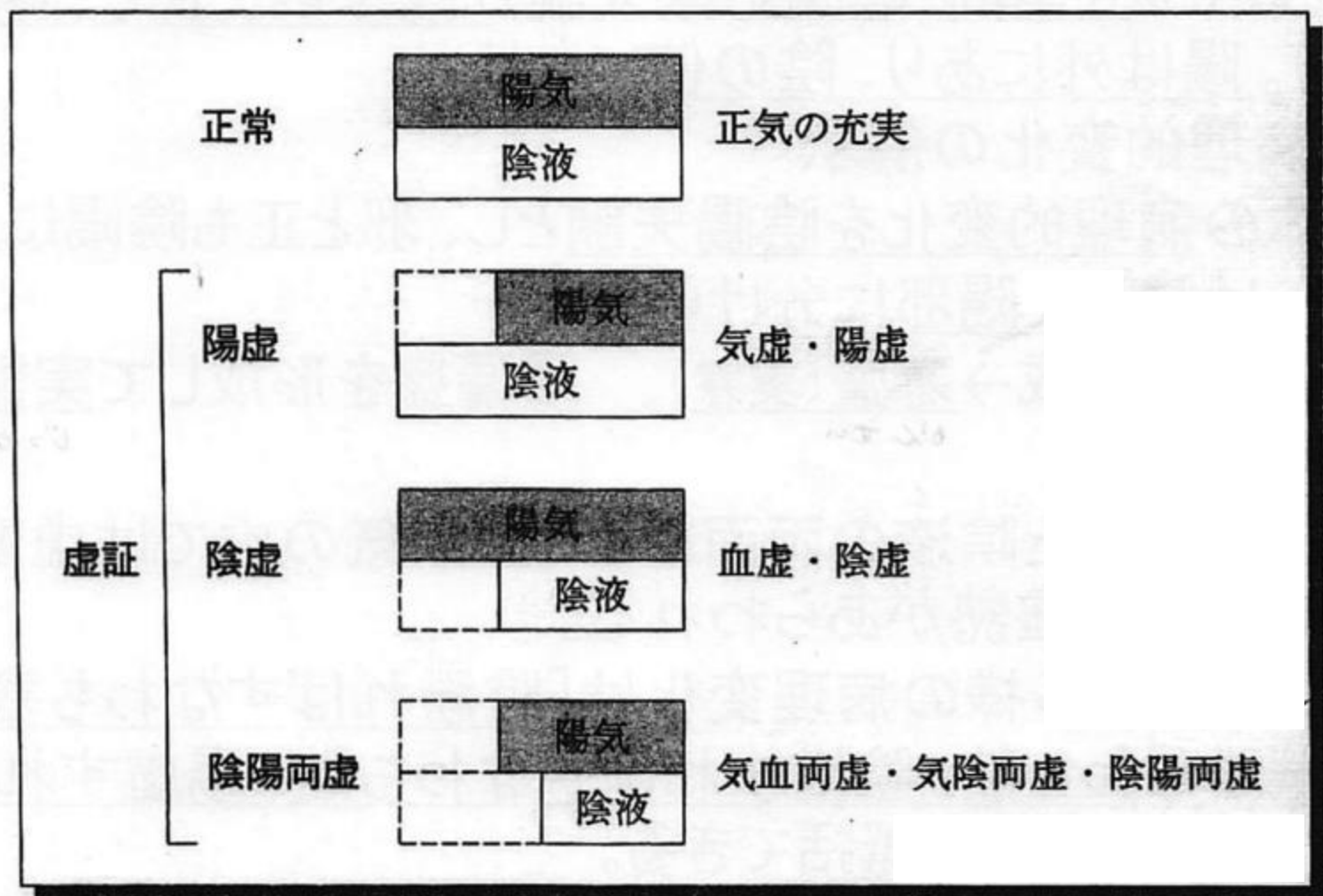


図2-13 虚証の概念

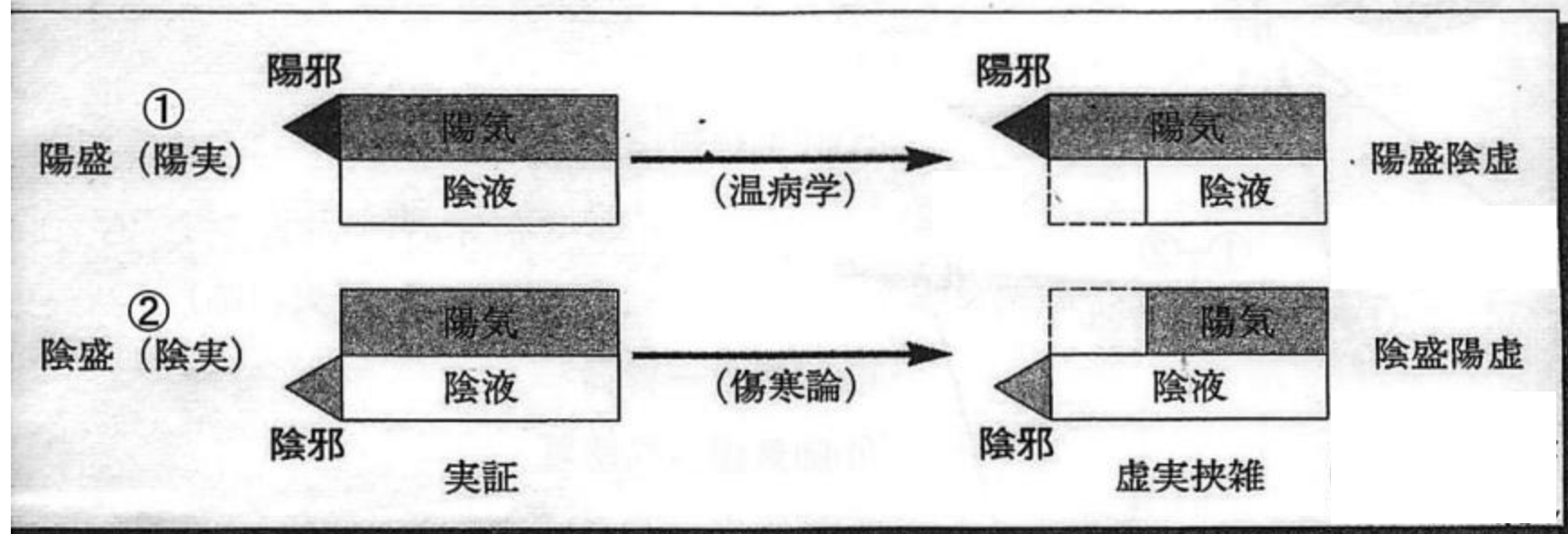


図2-14 実証の概念とその推移

「有余」をあらわす表現とともに用いられる
「陰陽」はすべて「陰邪・陽邪」を意味する

① 熱射病→温病→脱水・ひどい口渴

② 元気な人が、寒邪にあたり感冒(傷寒)→寒気して、意欲低下・疲労感

71才女性:155cm、57kg

ストレス多く、気を使う方で、不眠になりやすく、時々眠剤を使用する。閉経時50才のころから、疲れるとすぐ寒気がして、咽が痛くなり微熱が出て感冒症状になる。

最近では3日にあげずこの症状が出る。又、時には透明な水ばなが出てくる。2年前から夜間1度排尿で目覚めるようになった。

余り胃腸は丈夫ではない。

その他特に腎虚の症状は無かったが、八味地黄丸を処方した。

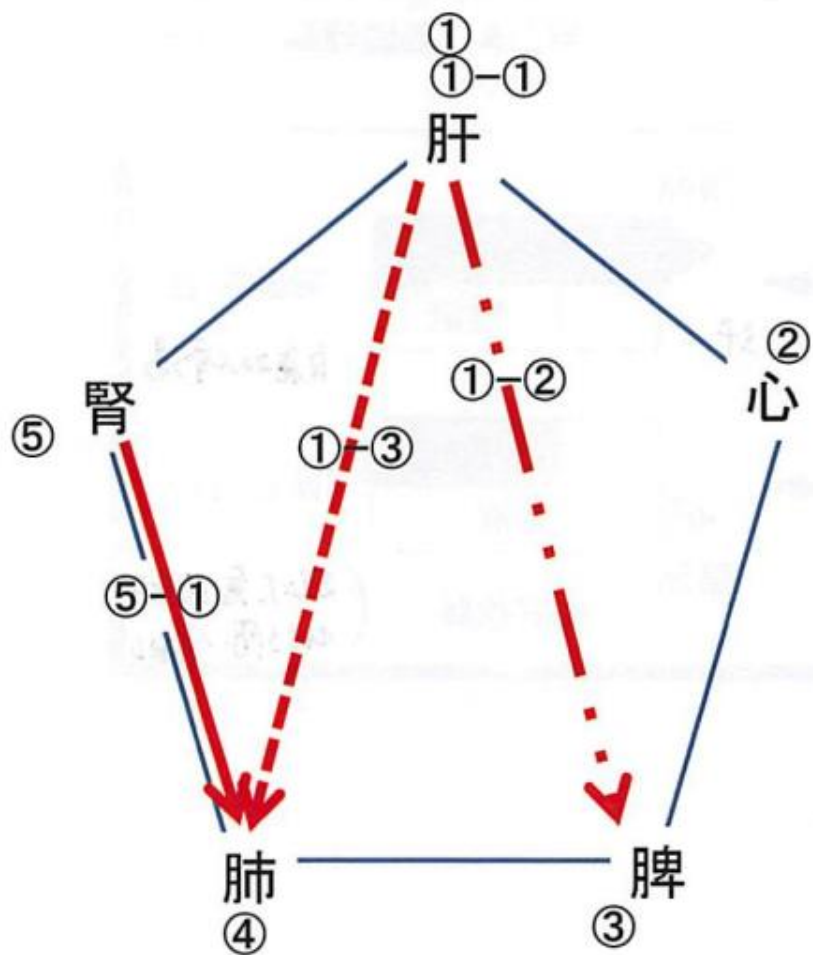
服用しだして、受診時の40日間風邪症状にならなかった。

以来八味地黄丸継続しているが、調子良い。

更年期がきっかけで、疲れたり気をつかったりすると、咽痛、寒気となるので、腎気虚が基礎にあり、そこへ老化が進むことにより、腎虚も進み、子(腎)盗母(肺)気で肺気虚が進み、疲れると、つまり気虚が起こると直ぐ肺気虚症状の、咽痛・寒気・ときに水鼻を伴うという症状が起きたと考えられる。

子病の逆伝の病で、比較的治りにくいと考えられる。

71 才女性:易感冒



①肝失疏泄→①-①肝鬱血瘀

①-②肝乘脾

①-③肝侮肺(肝火犯肺)

③脾氣虛—胃弱

④肺氣虛→易感冒

⑤腎陽虛→⑤-①子から母へ逆伝(子盗母氣)

参蘇飲(益気解表)の症例:71歳女性;血小板減少でプレドニン服用中総合病院通院中。易感冒。

消炎剤なども無効、漢方治療希望。無汗・少し口渇・軽度咽痛。参蘇飲投与にて気分良く精神的に落ち着き夜間寝られるようになった。1日1包服用で風邪引かなくなり、常用薬とする。

何となく風邪っぽい, 風邪気味で熱っぽいというのに適するように思う(漢方臨床320例)。

香蘇散の症例(理気解表)(香附子・紫蘇葉・生姜・陳皮)

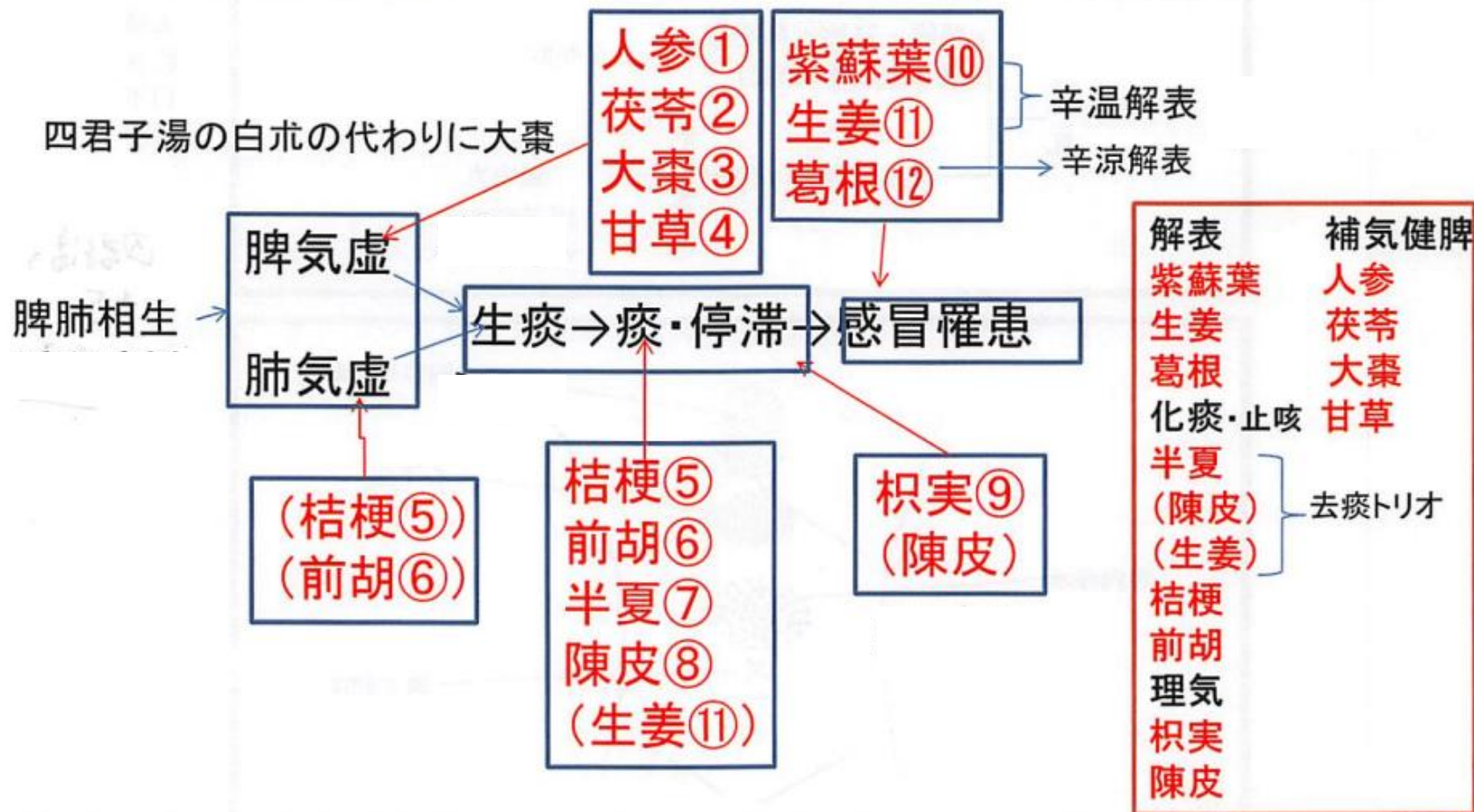
①60歳女性 (紫蘇葉:辛温芳香発汗解表 気滞を伴う風寒感冒)

胃下垂、いつも腹が張り、時々腹痛(気滞)。人参加減法有効中略。山中が寒くて風邪を引いた。香蘇散を飲服用で体が温まり直ぐ気分がよくなった。胃腸の弱い感冒によい。

②27歳婦人:1ヶ月前から全身に蕁麻疹。諸治療無効。

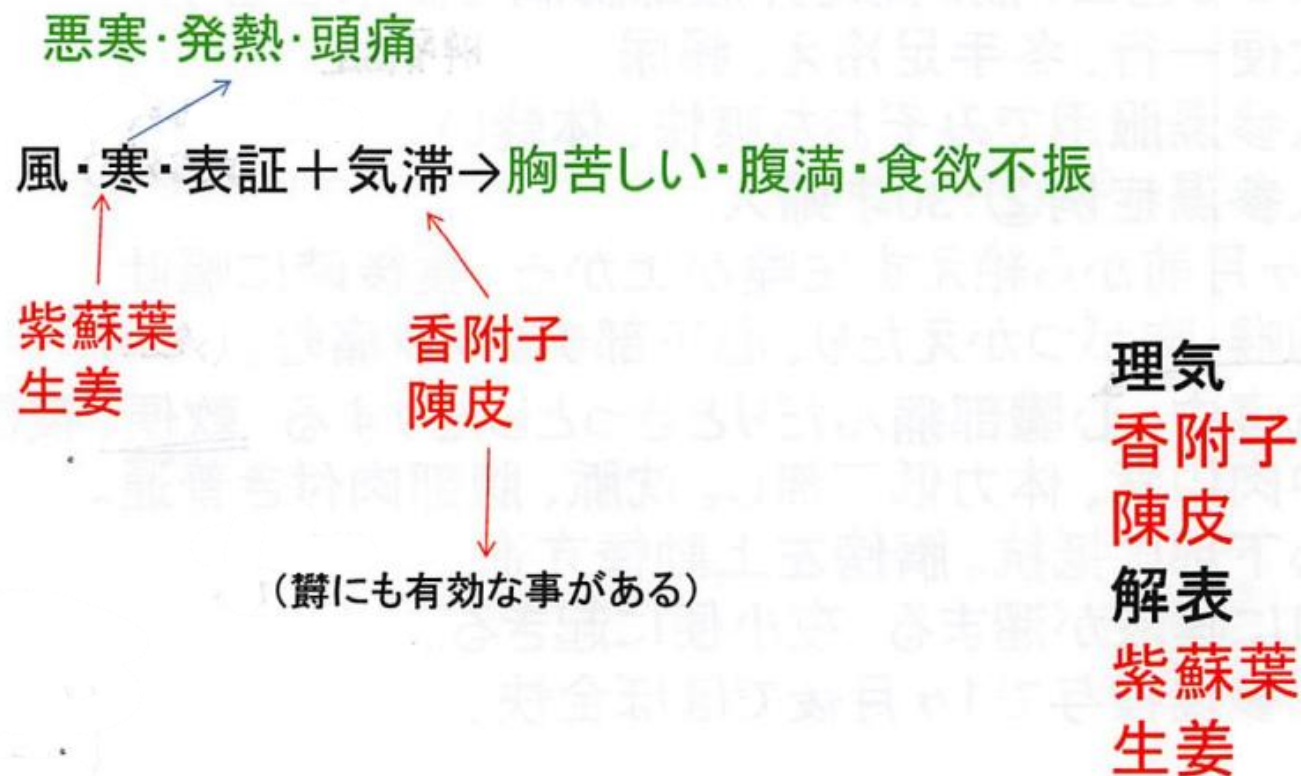
4ヶ月前にお産で無月経続く。両臍傍に抵抗感。桂枝茯苓丸無効。手足腹赤く腫れ上がる。痒みひどい。葛根湯で悪化。香蘇散+山梔子で1週間で略治。(気滞が強く、駆瘀血薬も無効だから、香蘇散で理気発散して去邪?)。

参蘇飲 主治:気虚・外感風寒・内鬱痰飲 効能:解表理気化痰 気虚感冒(胃腸虚弱の感冒) 止咳・補気健脾



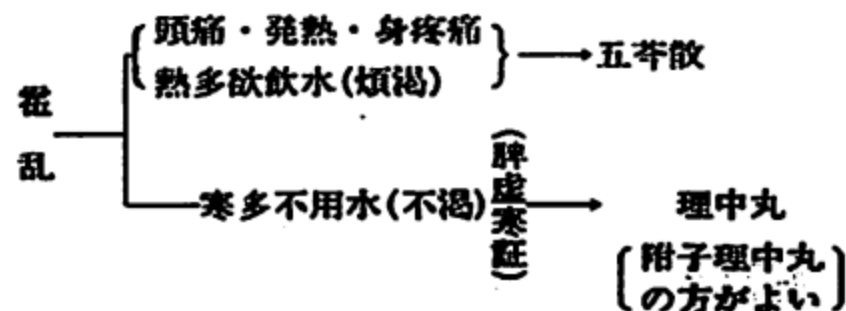
⑤止咳平喘:宣肺去痰・排膿消腫(治大腸疾患・水道通利) ⑥降気消痰・宣散風熱 ⑦化痰散結・降逆和胃 ⑧理気健脾・燥湿化痰 ⑩芳香行氣・寬胸a舒肝 ⑪温胃止嘔・散寒解表・散水 ⑫解肌退熱・透疹・生津止渴・升陽止瀉

香蘇散 主治：風寒表証＋気滞 効能：理気解表

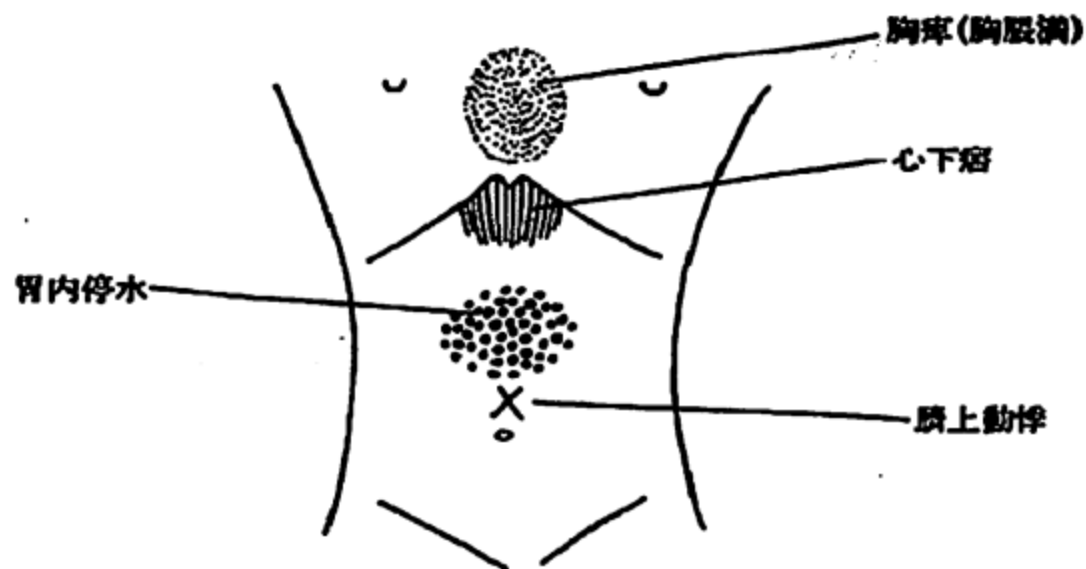


裏寒：寒邪直中の実寒証（太陰病脾虚証）→温中散寒；人参湯（＋附子）

第385条



人参
乾姜
白朮
甘草



人參湯症例①:50才婦人。大塚敬節:漢方診療三十年:

主訴:半年前から右脇下痛(つかえ感)、一週間前からみぞおちが痛む、痛むときその部が硬くなる。暫く後、音がして何か下に下がると、痛みが消失して患部軟らかくなる。その後放屁が多い。

太って色白、筋肉軟弱、腹部膨満で振水音著明。

大便一行、冬手足冷え、頻尿。

人參湯服用でみぞおち爽快、体軽い。

人參湯症例②:30才婦人

9ヶ月前から絶えず生唾が上がる。食後時に嘔吐。

咽喉・胸がつかえたり、心下部チクチク痛む。

就寝中、心臓部痛んだりどきっとしたりする。軟便、夜間尿1度。

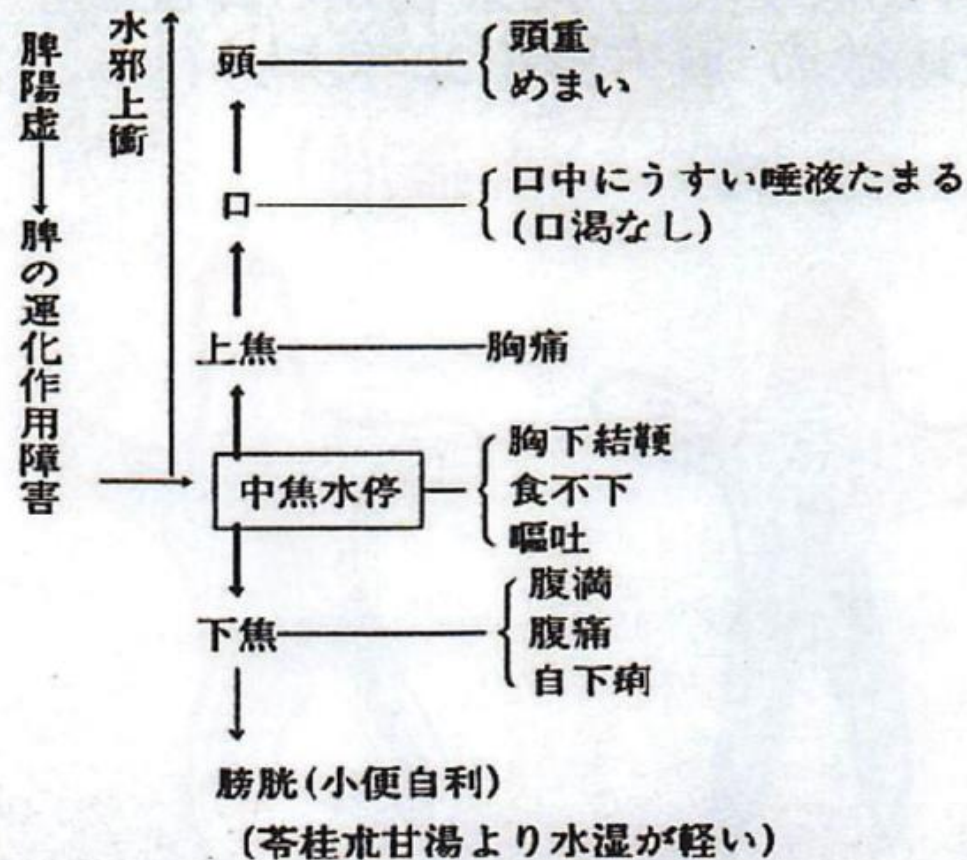
中肉中背、体力低下無し。沈脈、腹部肉付き普通。

心下部に抵抗。臍傍左上動悸亢進。

口に唾液が溜まる。夜小便に起きる。

人參湯投与で1ヶ月後でほぼ全快。

理中丸証のまとめ



人參湯(理中湯)のまとめ

真寒假熱症例

6才少女某年11月20日風邪気味にて、近医の処方により21日には39度、23日は40度以上となり譫言を言いだした。

25日往診。時折咳が出るが痰はない。顔色は赤くない。39度8分。舌湿った薄黄苔。口渴無し。脈浮数弱：120/分。腹部膨満、下痢続く。脱力無し。悪寒の有無について聞いてもはっきり答えない。右背部に中等度ラッセル。その他異常所見なし。小柴胡湯投与。27日往診にて変化無いので麻黄湯投与。

30日往診。顔面は蒼白で浮腫あり。うつむき加減に両手を胸に当て、心臓衰弱死する患者に似る。氷嚢・氷枕除去。

母親談：最初から非常に寒がって布団を上げると嫌がった。氷嚢も嫌がったが無理につけた。

真武湯を1時間おきに2度服用させたら、しばらくすると顔色が良くなり、元気が出てきた。

12月4日まで毎日往診。附子は1.6g/日を継続した。

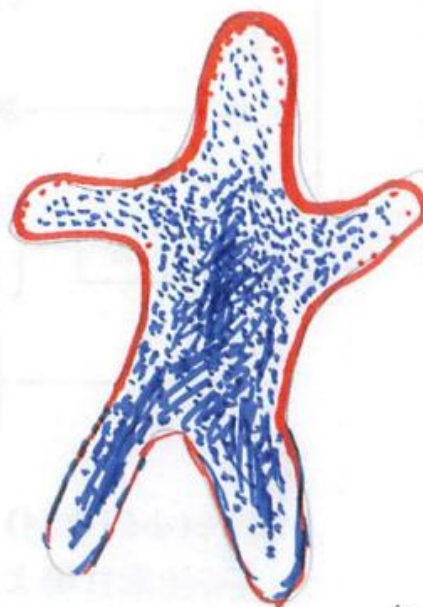
12月3日平熱となった。12月4日夕刻、悪寒発熱(40度内外)。この状態がその後、25日間続いた。⇒⇒⇒

12月30日はじめて発熱が37度以下となった。翌年1月12日まで真武湯を服用して全快。「少陰の病たる、脈微細、ただ寝ねんと欲するなり」であり、最初から真武湯を与えるべきであった(大塚敬節:漢方診療30年より)

・ 寒(陰) ・ 熱(陽)(新)



虚陽浮越



裏寒外熱

しんかんかねつ
(真寒仮熱)

今回の講義のまとめ

前回六淫、癘気、内傷七情、飲食失調などの病因について学んだ。
それらが発生したときに正気と邪気のバランスにより発病するかどうかが決まる。

人体の内部環境＝正気 外部の環境や痰飲食積瘀血＝邪気 であり
正気に影響するものは 先天的な体質 栄養 運動 精神状態などである。

病機を学ぶことで、病因に対し人体(陰陽・気血・経絡・臓腑)がどう反応し
疾病がどのように進展するかのパターンを知り、治療に生かすことができる。

陰陽失調(バランスの崩れ)

邪正闘争(虚のみ、実のみ、虚実錯雑、慢性化)

外感病は邪正闘争、内傷雑病は陰陽失調が主体(だが全てではない)

陰陽学説の基本的観点(属性としての陰陽、陰陽可分、陰陽互根、陰陽制約、陰陽転化)
を理解することで人体の生理機能、病理変化を解釈できる。